

真剣で帰還者に恋しな
さい！

晴貴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

川神学園2年C組小篠翼。

彼が通う川神学園、そして学園がある川神市は一言でいってしまえば常識外れだつ
た。

何が起きても『まあ川神だし』で納得されてしまう街。

しかしそんな騒がしい日常を遠巻きに眺める翼にも秘密があつて――？

目

次

歡迎会	野菜炒め	壁を越えた者達	納豆と謎	九鬼のメイド	強襲	不可解な一撃	梁山泊	監視	2 戦目	集団登校
145	129	115	97	84	63	51	38	26	13	1

歓迎会

俺が通っている川神学園に源義経が転校してきた。その家臣である武藏坊弁慶と那須与一も一緒にだ。

改めて口にしてみると俺の頭がイカれたように聞こえるかもしれないが、ところがどつこいこれが事実なのだ。

とはいえ歴史上の人物がそのまま在学しているわけじゃない。世界に名だたる九鬼財閥がその技術力を結集して産み出した偉人のクローン。

通称『武士道プラン』によつて産まれたのが義経達である。

……なぜだろう。事実を語つているのに頭のイカれ具合が増した気がする。

「義経ちやん強いな！」

「しかも超可愛いし！」

「そうだな」

「弁慶ちゃんも色っぽいというかなんというか……」

「エロいよな！」

「そうだな」

川神学園2年C組。その窓際から校庭を見下ろす男3人。

眼下の校庭では件の義経が挑戦者相手に大立ち回りの最中だった。屈強な男が車にはねられたかのような勢いでぶつ飛ぶ。

「おー、義経ちゃんまた勝った」

「可愛くて強くて礼儀正しくてしかも可愛い！」

「可愛いって2回言つてね？」

「大事なことだろ？」

「そうだな」

人体がそんな勢いでぶつ飛んだら普通は生死もしくは怪我の有無を心配するべきだと思うが、この川神学園ではそんな常識なぞ当てはまらない。

なにせ学園には決闘なるシステムが存在するからだ。

川神学園にはその土地柄か武術に覚えるのある人間が多く、また学園長である川神鉄心本人も高名な武道家だ。

恐らくはそういう要素がきっかけになつたんだろうが、今や武術に留まらずあらゆる勝負事を決闘で解決するのが学園の校風になつていて。良くなれば切磋琢磨できる実力主義。悪く言えば決闘は犯罪ですよ、ってなどころで

ある。

まあ学園内で賭場が黙認されてる時点で今さらなんだが。かなり治外法権的な学校と言えよう。

一応、学園内の決闘は合法らしいけど。

「なあ^{たつみ}異」

「あ?」

「お前さつきから『そうだな』しか言つてなくね?」

「……そうだつけ?」

「そこは『そうだな』じゃないんかい!」

ビシッと突っ込まれた。我ながら毒にも薬にもならないやり取りを展開しながら昼休みを過ごす。

川神学園はイベントに事欠かず、いつも騒がしい。特に2年のS組選抜クラスとF組問題児クラスが騒ぎの

中心になつていることが多い。

この2クラスには王を自称する九鬼財閥の御曹司とか、その従者でかなりの重量があるだろう人力車を猛スピードで牽引する忍者メイドとか、授業を抜け出してそのままふらりと数日間の旅に出る自由人とか、老若男女を食い散らかす超絶イケメンの性癖倒錯者とか、転校初日に馬で通学してきたドイツ軍中将の愛娘とか、彼女の護衛でトン

ファー振り回す現役軍人とか、女は小学生までと言い切るロリコンのハゲとか、命を懸けて女子の際どい写真撮りまくつてのカメラ小僧とか、お仕置きと称して生徒を鞭で打つ女教師なんかがいるのだ。

そりや騒がしいに決まってる。それにひきかえこのC組はキャラクターも成績も普通だ。

没個性なんて言われたりするが、日々の喧騒を遠巻きに観賞するには最適なクラスだろう。俺にはこれくらいがちょうどいい。

……なーんて思つていた矢先のこと。

その日、義経達の歓迎会兼誕生会が開催される、という一報が校内を駆け巡った。
これに食いついたのは俺の友人達である。

「異、行こうぜ！ 桃源郷に！」

「なんで桃源郷？」

「なんでつてお前、参加するメンツ見てみろよ。全学年の美人どころほど来るんだぞ？」

いつの間に開設されたのか、歓迎会用のHPの画面を俺に見せつけながら力説する。義経達が転校ってきてまだ数日だというのに仕事が迅速だ。

ちなみに桃源郷の本来の意味は俗世を離れた仙境である。樂園的なことを言いたい

ユートピア

んだろうが、残念ながら真逆だ。

まあ要するに学園の美人が一堂に会するからお近づきになりに行こうぜ！という誘いなのだが。

確かに学園には美人が多いし、美人には武士娘ぶしむすめが多い。

しかし如何せん彼女達は個性的すぎやしないかとも思う。おまけにどうも彼女達の周りはハプニングに溢れているようなので、ゆっくり平穏な学生生活を送りたい俺としては一定の距離を保つておきたかった。なので俺の返事は決まっている。

『かんぱーい！』

学園の多目的ホールに唱和された乾杯の音頭と、グラスが合わさる音が鳴り響く。
不肖、こしのたつみ小篠翼。義経達の歓迎会に参加しております。

クマちゃんが厳選した材料を用いた料理の魅力には勝てなかつたよ……。

歓迎会が開始されてすぐ、連れ立ってきた友人2人は引き寄せられるように美少女達の方へフラフラと行つてしまつたので、俺は一人で黙々と料理に舌鼓を打つ。

川神1の食通であるクマちゃんこと熊飼満が選び抜いた至高の具材だけあつて何を食つてもうまい。きつと調理した奴の腕前も相当なんだろう。

学園には学生でありながらプロ顔負けの技能を持つた生徒が沢山いるからなあ。その最たる例は武神・川神百代だ。

川神鉄心の孫娘にして、世界最強との呼び声も高い武道家。俺からは知り合いたくない人N.O.・1の称号を与えよう。

川神先輩はバトルジヤンキーらしいからな。絶対に絡まれたくない。
ちらつと見てみれば葉桜先輩(はざくら)や松永先輩(まつなが)と談笑しているようだ。

なぜか川神先輩が美少女を侍らせているように見えるが、しかしその実態は魔境である。

納豆小町としてご当地アイドルやつてる松永先輩も武道家としてはかなりの腕前だし、葉桜先輩も武神に迫りかねない苛烈な闘気を宿している。

もしあの人達が暴れ出したら川神市が地図からなくなるだろう。くわばらくわばら。

あまり見ていると勘付かれそうで視線を外す。次に目についたのは本日の主役である義経、弁慶、与一の3人。

義経は参加者の元を回りながらはきはきと感謝を述べ、弁慶は川神水を飲みながら主の傍らに寄り添っていた。与一は……ああ、弓道部に勧誘されてら。

葉桜先輩も含めてクローン組を間近で見るのは初めてだが、やっぱり独特の雰囲気があるな。

それは強さがどうのこうのとは関係なく、もつと根本的な部分の話だ。

そして気がかりなのは、このクローン独特の雰囲気に覚えがある、ということだ。

どこでだっけかなあと思案しながらも料理を口に運ぶ手は止まらない。むしろ加速している。

「ああ、料理がうますぎて考えていたことがどうでもよくなつていく。
俺も料理覚えてみるかなあ……」

絶賛独り暮らし中の身からすると美味しい食事の有無は結構な死活問題だ。外食か市販の弁当を主食にして1年ちよつとになるが、そろそろ飽きてきてる。

自炊は面倒ではあるけど、出来るようになれば食事のレパートリーも広がるだろう。最初は四苦八苦するだろうが、慣れてしまえば……。

「あああああ、あの！」

「ん?……うお!？」

声をかけられたので振り向くと、そこには刀を握つて怖い顔した女子生徒がいた。驚いて思わず半身ほど後ずさりしてしまう。

「まゆっち！顔！顔怖いから！」

「はうつ！」

まゆっちと呼ばれた女子は後ろに控えていた男子生徒に表情を指摘されて一気に涙目になる。どうやらメンチを切りたかつたわけではないらしい。

「ま、またやつてしましました、松風……」
まつかせ

「元気出せまゆつち。男子に声をかけた勇気、オラ忘れねえぜ」と思つたら今度は馬のストラップと会話を始めた。腹話術か?

帯刀も含めてなかなかファンキーな女の子だつた。

一緒にいた男子は顔を押さえてため息を吐いているけど。

「……えーっと、まゆつちさん?」

「は、はい! 1年の黛まゆずみ由紀江ゆきえと申します!」

「2年的小篠異だ。それで俺に何か用でも?」

「そそ、それはですね! 先ほど料理を覚えたいとおっしゃつていたと耳にしまして……」「ああ、そんなことも言つたかな」

どうやら独り言を聞かれていたらしい。

「実はまゆつちも料理を準備した一人なんだ」

見かねたように男子生徒……あ、よく見れば2—Fの直江なおえだつた。あまり面識はない

が顔の広い奴なので名前くらいは知つている。

その直江が会話を続かせるためか助け船を出した。

「マジ? 黛さん料理上手なんだ」

どれを作つたかは分からないが、この歓迎会に並ぶ料理を作るシェフに名前を連ねた時点で腕前は伺い知れる。

「そうなんだよ。それに初心者でも簡単に作れる料理とかも知ってるんだ」

「きょ、恐縮です」

「なるほど。なんとなく話の流れが見えてきたような……」

直江は学園内で特に顔が広い。よく貸し借りを作つては人脈作りに勤しんでいると聞く。

そして恐らく今回は黛さんのために何かしようとしてるんだろう。そうすれば貸しをひとつ作つておくことになる。いざという時に力になつてもらうつもりなのかもしない。

問題は黛さんが何を求めて俺に声をかけてきたかつてことだけ……。

「こ、小篠先輩さえよければなんですが……料理をお教えしますので私と、おとととお友達になつていただけないでしようか!?」

「……お友達?」

「はい!」

黛さんはテンパつてているようなので直江の方を見てみる。直江は静かにうなずいた。

「え?本当にそれだけ?」

「まあ、俺でよければ……」

「本当ですか!?」

「ウエエエーイ！やつたぜまゆつち！」

「ありがとう松風！伊予ちゃんに続いて2人目のお友達ができました！」

再びストラップと会話を始めた黛さん。

友達ってこんな交渉じみたことで作るもんだつけという疑問はさておき、この現象について直江に尋ねてみる。

「えっと、直江だよな？F組の」

「ああ、そうだ。まゆつちの友達になってくれてありがとう小篠くん」

「いや、それはいいんだけどさ。なんで彼女はストラップと会話をしてるんだ？」

「小篠くん、あれはストラップじゃないんだ。ストラップに魂が宿つた九十九神であつて、決して腹話術ではないんだよ」

「……ああ、そう。まあ面白い個性だと思うよ」

「そう言つてくれると助かる……」

それめっちゃ本音だよね？とりあえず馬のストラップ……松風は黛さんとは別の個人？個体？として扱えばいいらしい。

松風と会話するのが通常なら、そりや友達を作るのも苦戦するわなあ。

「じゃあ良き友人としてこれからよろしく、黛さん」

「はい！」

そう力強く返事をした黛さんの笑顔は柔らかく、そして嬉しそうだった。

日頃からそういう顔で笑えれば友達作りも捲ると思うんだけど、それを口にして水を差すことはない。

こうして義経達の歓迎会に参加した俺は、後輩の女の子＆九十九神という友達が出来たのだった。

野菜炒め

『お疲れ様でしたー!』

秘密基地にファミリーの声が響く。義経達の歓迎会は成功に終わり、主催者としては肩の荷が降りた気分だった。

そしてこれからは会の成功を祝しての二次会である。

「歓迎パーティーはおかげ様で成功したし……ほんとお疲れ様でしたっ!!」

俺の口から実感のこもった言葉が飛び出す。

「いやあ、今週は色々あつたね！マジマジ！」

「日曜日は東西交流戦で西の人達と戦つて……」

「月曜日に源義経達が現れて……」

「さらに松永燕まつながつばゆという手練れも現れた」

キヤップ、モロ、クリス、姉さんが今週の出来事を列挙していく。こうして聞くと本

当に色々あつたな。

「モモ先輩と戦えるなんて、凄い先輩ですよね」

校庭で行われた姉さんと燕先輩の手合せを見ていたらしいまゆつちも感嘆していた。

「とにかく技が多彩で面白い。本人も面白いし」

強者を求めていたる姉さんは満足そうにそう言つた。

そんな燕先輩でも姉さんには届かないという。恐ろしい人を姉貴分に持つたものだ。

「まゆつちは今日のパーティーで友達できた?」

「紋ちゃん」と電話番号を交換できました!』

「おーやるじyan! 大物を釣り上げたな!」

「ありがたいことに、私を九鬼財閥に誘つてくださつてるんです。困つた事があれば電話してこいと……」

「飛び級してきたとは思えない器量にオラ感動」

九鬼英雄の妹である九鬼紋白。見た目は小柄だけど器の大きさはさすが九鬼の血縁者だつた。

そんな彼女と連絡先を交換できたまゆつちにファミリーのメンバーから次々と賛辞が送られる。

「じゃあまだ友達、とまではいかないのかな?」

「はい。でもこれからどんどん話していくこうと思ひます」

「実に建設的でいいではないか」

「明るい話題が多くてめでたいな」

「そうだね。それにまゆつち、もう一人友達もできたし」

「なに、そうなのか？」

「実は大和さんのおかげで、2年生の先輩と友達になつていただきまして……」

「おお、年上とはやるねえ！」

自身もあまり人付き合いが得意とは言えないモロが感心したように言う。だが驚きはそれだけじゃない。

「しかも相手は男子だからね。異性の友達だよ」

「うお、マジか」

一部を除いたファミリーの面々が俺の言葉に色めき立つ。

ついでにどういう経緯でそうなつたのかも説明しておいた。

「なるほど。料理を覚えたがつていたから、その辺をつついて友達になろうと

「でも大丈夫なのか？まゆつちは美少女だし、変な男だつたら大変だぞ？」

「び、美少女だなんてそんな……」

クリスが全くもつてその通りなことを口にする。

だが俺も誰だつていいから友達にしようとしたわけじゃない。

「それはまあ心配しなくとも大丈夫そうな人を選んだよ。C組の小篠くんって人なんだけど……」

「小篠……知らねえな」

「C組の人つていまいち目立たないからね。まあ僕が言えたことじやないけど」

「確かに目立つタイプじゃないけど、落ち着きがあつてよく相談事とかされてるんだ。告白されてもずっとフリーらしいから女関係にだらしないってこともない」

何より目の前でいきなり松風と会話をし始めたまゆっちに対しても、驚きながら個性的で面白いと評したくらいだ。

その話をすると皆が感心する。

「それは凄いわね。松風をすぐに受け入れられるなんて……」

「でもまあ告白とかされてる時点で俺様にとつては敵だがな」

「そんなこと言つたらキヤツプはどうなるのさ？」

「キヤツプはいいんだよ。女より冒険だろ？」

「おうともよ！俺のことよく分かつてんなガクト！」

「ガクト×キヤツプ……ありだ！」

「ねーよ！」

10点満点の札を挙げた京にガクトがつっこみを入れる。みやこ

いつも通りの光景だった。

「まあ大和がそこまで言うなら納得するが……」

「心配ならついてくるか？月曜に早速料理部に場所を借りて料理を教えることになつてるんだけど」

「さすがにそこに顔を出すのは不粋だろう」

「そうでもないさ。小篠くんからその時は俺も一緒に来てほしいって言われてる」
たぶんまゆっちは口下手なのを察して円滑に会話をするためにそう提案したんだろう。

その一言でまゆっちは心配していた面々の小篠くんに対する印象が変わったようだ。
配慮がてきて、気も回る人だというのが理解できたらしい。

「へえ、それならまゆっちに対する下心はなさそうだな」

「まあ相手も男だし完全にないわけじゃないだろうけど、評判を聞く限りここまで心配
はしなくてもいいと思う」

「ならないんじやねえの？ 可愛い子には旅をさせろって言うしな！」

「勇往邁進よまゆっち！」

「はい、頑張ります！」

歓迎パーティーの成功とまゆっちの新しい友達、そしてモロが演劇部に入る報告など

など、それらをひつくるめて祝う二次会は夜更けまで続いた。

週が明けて月曜日。今日も川神学園は活気に溢れていた。

S組の前を通りかかったら弁慶が「今日は飲まなければやつてられない！」とか言つ

て川神水を煽っていた。

何事かと思ったが、考えてみれば本日6月15日は衣川合戦の日であり、史実によれば義経と弁慶の命日だった。

クローンとはいえ当時の記憶があるわけでもないだろうに、それでもやけ酒せずにはいられないのだろうか。

義経は今日も元気そうに挑戦者をなぎ倒してたけどな。

まあそんなこんなあつて迎えた放課後。今日は黛さんから料理の手ほどきを受けることになつていて。

家庭科室の一部を間借りして料理部に混ざつての作業になるが、すぐにこいついう場所を整えられるのが直江の日頃の努力の賜物なんだろうな。

「ほ、本日はよろしくお願ひします！」

黛さんは相も変わらず表情が険しい。

「よろしく。教えてもらう俺が言うのもなんだけど、そう固くならずに」

「そうだよまゆつち。寮でやつてるようにすればいいんだ」

「あれ、直江も黛さんも寮なの？」

「ああ、俺は両親が海外を飛び回つてて……」

「私は北陸出身なんです」

「だからか。今さらながら俺も寮に入ればよかつたな」

「小篠くんは地元じゃないの？」

「小篠でいいよ。生まれは神奈川だけど七浜の端っこだからな。学園に入るまで川神とは縁がなかつた」

「あー、七浜だとこつちまで出てくる必要ないもんね。でもそれじゃ通学大変なんじやない？」

「だから今は独り暮らししてるんだ。黛さんはなんで川神まで？」

「実は私、地元ではちょっとした有名人として……」

「有名人？」

「ほら、聞いたことないか？剣聖黛つて」

「あるな。もしかして黛さんは……」

「はい、剣聖黛まゆずみたいせい大成の娘です。剣聖の名前は地元だと神格化されているので、その娘である私も畏怖されてしまい友達を作ることができなくて……」

「だから友達を作るために川神までやつてきたわけさ」

「友達100人を目標に頑張ります！」

友達を作るためにそこまでやるとは健気というか、必死というか……。あれ、でもこの間俺が2人目の友達とか言ってたけど果たして今のベースで目標は達成できるのだ

ろうか。

けどまあこれで黛さんが帶刀しているわけや、壁越えの実力者である理由も知ることができた。

直江が黛さんに貸しを作つてるのは本人の武力や黛の家名を使いたいためかもしない。

でもこうして一緒に作業してみるとあまり打算的なものは感じないんだよな。どちらかというと純粹に黛さんの力になろうとしているように見える。

まあ何にせよ俺にはあまり関係のないことだけど。

迫力に押される形で友達になつてしまつたが、対人スキルが壊滅的なことを除けば黛さんは常識人っぽい。友達として友好を深めれば固さも取れていくだろう。

どこかの武神のようにバトルに飢えているようなタイプにも見えないし、絡まれて無用な注目を集めることもあるまい。

「そういえばまゆっち、今日は何を作るの？」

「小篠先輩からのリクエストで野菜炒めを……」

「……チヨイスが渋いね」

「男の独り暮らしは野菜が不足しがちなんだよ」

気にはなりつつも外食メインだとやつぱり野菜の摂取量は少ない。それに野菜炒

めつていざ作つてみても味付けに困るんだよね。

塩コショウだけだと味気ない感じがするし、かといってどの調味料を使えば旨味が出るとかさっぱり分からない。

定食屋で出てくるような野菜炒めが作れれば野菜を食べる習慣もできる……気がする。

「野菜炒めは栄養のバランスも摂れますし作るのも簡単ですから。最初に覚える料理としては適していると思います」

「言われてみれば確かに……」

「そういうわけでよろしく頼むよ。まずは野菜の皮剥きからだな」

せつかくの機会なので本当に初歩の初歩から教えてもらうことにした。

「そこはピーラーでいいんじや?」

「やるからはには桂剥きとかできるようになりたいじやん」

「思いの外目指してるレベルが高い!」

「小篠先輩パネー」

俺は形から入るタイプなのである。

そんな感じで直江と黛さん、そして松風とわいわい楽しみながら野菜炒めを作った。味はそこそこだつたけど作り方は覚えたし、今度から家でちょくちょくやってみよ

う。

ちなみに審査員松風と料理部2人の判定は1位黛さん、2位俺、3位直江。直江が少し悔しがつてたのがなんとなく意外だつた。

——夕刻、たまがわ多馬川河川敷。夕焼けと宵闇が混ざりあつた、薄暗い黄昏時。
そこに一人の男が立つていた。その出で立ちは胴着姿であり、彼が武芸者であると一

目で理解できる。

彼は自分を奮い立たせるように言葉を口にした。

「ここが川神か……武神、そして源義経がいる街」

「俺こそが最強の武道家だ。」
武芸者として過去の偉人と手合わせをしたい。その一心で彼は川神の土地を踏んだのだ。

元より地元ではもう敵無しである自分がどこまでやれるのか試してみたかった。むろん、義経にだつて勝てるという自負がある。

「俺は源義経に勝つてみせる。そして武神にも！ そうすれば——」

「どう統けようとして、しかし遮るように言葉が重なる。

「貴方は腕試しに来ている武芸者ですね」

声がした。振り返れば架橋の陰から滲み出たかのような人影が立っていた。

「フードを目深く被っているせいで顔は見えないが、声と体つきからして若い女性……いや、少女と呼ばれる年齢だろうというるのは分かる。」

「 그렇다. 그녀는 누구인가요?」

「私はファンタム・サン。宜しければ一勝負いかがでしようか？」

友人をお茶にでも誘うような軽い調子でファンタム・サンと名乗った少女は勝負を提

案してきた。

平時ならば鼻で笑うところだが、ここは武都・川神。ここでは街行く女学生ですら一線級の武道家であると聞いたことがある。

その噂が真実だとしたら、目の前の少女も油断ならない実力者かもしねい。
それでも遅れを取るつもりなどはさらさらない。

「いいだろう。俺も川神のレベルを体感しておきたかったところだ」

河川敷で2人は向かい合う。

そして勝負開始と共に男は腹部への強烈な衝撃を感じ、意識を手放す。完全に気絶する直前、彼の耳には亡靈の声がしつかり届いていた。

——ありがとうございました、と。

壁を越えた者達

その日、川神学園ではとある噂が広がっていた。それはファントム・サンと名乗る謎の人物が腕の立つ武道家を倒して回っている、というものだつた。

噂の信憑性はともかくまた変な奴が川神に現れたらしい。

まあだからといって何かあるわけでもなく、俺ができることと言えばファントム・サンに出会わないよう警戒しておくくらいしかない。

俺はバイト先の梅屋で同僚にそんな噂話を披露していた。

「糺迦堂さんは知つてました？」

「いいや、聞いたことねえな」

「よつとおつかない風貌にぶつきらぼうな物言いをする人だが、話してみると案外楽しく会話できる。

……まあその見た目通りめちゃくちや強い人ではあるんだけど。なんでここで働いてんのか意味分かんないレベル。

九鬼の斡旋できた人だからそつちの関係者なのかもしれない。

釈迦堂さんの知り合いだという女性——板垣いたがきさんしかお客様がないことにかまけて駄弁る。ちなみに板垣さんはメニューを選んでいる最中に寝てしまった。

この人はだいたいいつもこんな感じだ。見かねた釈迦堂さんが勝手に選んで出すまでがお決まりの流れになつていて。

ちなみにこの板垣さんも釈迦堂さんほどではないとはいえかなり強い。どうなつてんだこの街。

それからしばらく駄弁つていると自動ドアが開いた。

「いらっしゃいませー」

俺と釈迦堂さんの声が重なる。

店に入つてきたのは学園長と川神学園の教師、ルー先生だつた。

学園長は言わずもがな、川神院で師範代を務めるルー先生もかなりお強い。戦つたらたぶん釈迦堂さんにも勝てると思う。

「おお、やつとるやつとる」

「まさかお前がここで働いているとはね、釈迦堂」

2人が釈迦堂さんに話しかける。

釈迦堂さん知り合いなのかよ。九鬼の関係者かと思つたら川神院の関係者だつたのか。

「なんだよ。俺に何の用?」

「お前がここにいると聞いたテ、様子を見に来たまでダ」

「しかしその服似合わんのう」

「余計なお世話だつての」

ルー先生の碎けた口調つてなんか新鮮だな。それだけ知つた仲なのかもしれない。
一定以上の強さを誇る武道家を『壁を越えた者』と称するらしいが、ルー先生も釈迦堂さんも壁越えしてる超人同士だから古い縁があつても不思議じやないな。

なんて考えていたら学園長とルー先生は牛飯野菜セットとてりたまハンバーグ定食を頼んだ。食べていくのか。いやまあ牛丼屋だから当たり前なんだけどさ。

一触即発するような空氣ではないがあまりにも強すぎる人達が集まつていると何が起くるか分からないので、早々に食事を終えて立ち去つてほしいところだ。

「……ああ、やつぱり川神院の皆か」

「すごい氣だつたからね。何かと思つたよ

「異常がないなら何よりです」

しかしそんな俺の希望を打ち碎くような来店。やつてきたのは川神先輩、松永先輩、そして黛さんの3人だった。

つーかどうして黛さんは川神先輩と一緒になんだ?もしかして知り合いなのか?

「お、モモ達じやないか」

「悪いなじじい、おごつてくれるなんて」

「誰もそんなこと言つてないわい！」

「ありがとうございます。私豚丼、単品とろろで」

「分かつてるねえお嬢ちゃん！おごつてやれよ！」

学園長の声など聞こえていいかのように松永先輩が注文する。

そしてまさかの釈迦堂さんによる援護射撃。

「しゃーないのう……内緒じやゾ」

「ありがとうございます。それでは私は、えーっと……」

「まゆっちここはあれだ、牛丼汁だくだ。お願ひしまーす」

「ああ、松風が勝手に頼んでしました……」

黛さんもいい性格してるなあ。いや、これは松風がやつたことになるのか。

とりあえず場違いな俺は気配を消してやりすぐ……

「あ、小篠先輩」

せなかつた。

いくら気配を消しても注文取つてればまあバレるよなあ。

「なに？ つてことはお前がまゆっちの友達なのか？」

そして武神にも認識された。黛さんのことを見江と同じ愛称で呼んでるってことはやつぱ友達っぽいな。

なんてこつた。もしかして直江も川神先輩と友達だつたりするんだろうか。

「ふーむ……普通だな」

それが俺を植踏みした川神先輩の感想だつた。

「そりやまあ川神先輩と比べたら大抵の人は普通ですよ」

「お、言うねえ」

松永先輩はいたずらっぽく笑う。

ちなみに松永先輩と比べても大抵の人は普通だと思う。

とりあえず頼まれたメニューを準備しに厨房へ引っ込む。そしてお盆に豚丼とところを載せて戻つてくると、新しい人間が増えていた。

「この店で何が起きてるのかと思えば……」

その正体はつい最近、義経達と同じタイミングで転入してきた1年S組のヒュームくんだつた。

1年生つて言つても50すぎたおっさんだけどな……。

肩書きは九鬼の従者部隊の零番。そんでこの人も余裕で壁を越えてる。

「なあに、ただ客として集つててるだけじゃよ」

「赤子の群れか。フフフ……」

「これはこれは……何という險悪なムード」

また1人増えたぞおい。ヒュームくんと同じ服装つてことはこの人も九鬼の従者か。

しかし当然のように壁を越えてるなあ。

「また危険なレベルの人間が増えたネ」

街角の牛丼屋に壁を越えた人間が7人とか悪夢のようだ。世界征服だつて可能なんじやないか？

「フ……赤子共はすぐ怒るということだ」

「喧嘩を売るのが好きな人ですね。高く買いますよ？」

やめてくれよ。お前らがそんなことしたらここが吹っ飛ぶだろうが。

「お前はすぐ挑発に乗るでない」

「マイ納豆を取り出して……これらとブレンドっ！」

松永先輩は周囲の空気に我関せず。カバンからパックの松永納豆を出して豚丼にかける。

だがよく見れば腰に下げた武器のようなものに手をかけているのでいざ戦闘となればやる気らしい。

けど松永先輩、その前に当店は飲食物の持ち込みはお断りしてますね……。

「さてどうする赤子共?」

「どうするもこうするもないでしよう」

依然挑発を続けるヒュームくんの頭を、同じ従者部隊らしい白髪のじいさんが軽く叩いた。

「ここは食事をするところです。闘気をおさめて下さい」

「……まあいいだろう。おいつ、牛焼肉定食^{ダブル}Wでライス特盛だ」

「かしこまりました」

1秒でも早くこの場から離れたかった俺はヒュームくんの注文を取つてそそくさと姿を消す。飯食つてさっさと帰つてくれ。

その後も直江が九鬼妹と一緒に来店したり、凄まじい気に釣られるように九鬼姉、義経、弁慶の3人衆までやつて来たり、さらにその後葉桜先輩まで姿を現した。

極めつけはそんな人外魔境と化した梅屋に強盗が押し入つた。新手の自殺かな?

そんな命知らずの強盗は人質に取つた葉桜先輩に逆に突き飛ばされて、無人で動く自転車に股間を攻められたあと、九鬼の関係者に連れていかれた。

怒濤の展開すぎるだろ。

普段のバイトより数倍疲れた。店長も俺と同じ気持ちだったのか、賄いの牛丼弁当を2つくれたその優しさだけが救いである。
まかな

ともかくバイト先が壊滅しないで良かった。
さりとて今日という1日はまだ終わらない。

「うう……」

帰り道で通りかかった多馬川の土手。深く生い茂った草むらの奥から人の呻き声が聞こえてきた。

げんなりしつつ、しかし緊急性のある事態だとヤバいので草むらの中を覗き見る。

そこにはジャージを着たお姉さんが行き倒れていた。

「大丈夫ですか？意識はありますか？」

「だ、大丈夫……だから……」

「具合悪いんですか？自分の名前は言えますか？」

「名前は、たちばなたかえ 橘 天衣……本当に大丈夫……」

ぐうぐう、と豪快に腹が鳴る。むろん橘さんの腹だ。

どうやら怪我や病気ではなく空腹で倒れていただけらしい。いやまあそれもなかなかの案件ではあるけれども。

「これ食べてください。バイトの賄いで悪いですけど」

「そんな、受け取れないよ」

「かといってこのまま貴方を無視していくのは俺の精神衛生上よくないんです。だから

俺の心を助けると思つて」

「でも、私に関わつたら君にも不運なことが起こつてしまふかも……」

「それならもう前払いしてきてるから平気かな……」

あんな人外集団の中に放り込まれるとか地獄以外のなにものでもないわ。

川神学園に入学して以来最大の不運を切り抜けてきたんだからあれ以上のはそういう起こりそうもない。

「とりあえずこれ置いてくんで気が向いたら食べてください。じゃあ俺はこれで」

「あ……ありがとう……」

あんまり人と関わりたくないさうな雰囲気を感じたので目の前に牛丼弁当が入った容器を置いて立ち去る。

ああいうタイプはあれこれ手を焼こうとすると逆効果になることが多いからな。どうせこれつきりの関係だろうから押し付けてさよならしてしまえばそれまでだ。

しかし相当弱つてたけど橘さんもあれ壁越てるよな？

それほどの人がどうして空腹で行き倒れになんてなるんだか。世の中は謎に包まれてることがあるもんだ。

例えはそう、川神で旬の話題であるファンタム・サンの正体とかね！

「びっくりさせてごめんなさい」

橋さんと別れてしばらく。人通りがさらに少なくなつたところで上空から男が降つてきだ。

さらに数瞬遅れてフードを被つた女性も土手に降り立つ。

そいつは男を降らせるという異常気象を引き起こしながら、だいぶ軽い謝罪で済ませた。

足元には白目を向いて氣絶した男。格好からしてこいつが武道家であることが見てとれる。

そして数メートル先に立つてゐるフードの女。この女も壁を越えてる。

今さらだけど川神つて頭おかしいんじやねえの？ため息が出るぜ。

「あんたが噂のファンタム・サンか？」

「あら、私も有名になつたのかしら」

「まあそれなりなんじやないの」

「あまりこの名前が有名になるのは望ましくないんだけれど」

じゃあファンタム・サンとか名乗るなよ。

そう突つ込むのは簡単だが、俺にはそれよりも気にかかることがあつた。その疑問を思わず口に出してしまう。

「なあファンタム」

「そう呼ばれるのは新鮮ね」

「1つだけ聞きたいことがあるんだけど」

「時間がないから本当に1つだけよ？ちなみにスリーサイズは秘密」

ファンタム・サンは思いのほか愉快な性格をしているようだ。

けど今はそんな情報どうでもいい。俺はこの正体不明の相手に既視感を覚えている。

「あんた、もしかして義経達と同じクローンか？」

瞬間、ファンタム・サンの雰囲気が変わった。というかイメージの中で斬りかかってきやがつた。

いきなりすぎたので思わずそれを捌いて喉元に剣を突きつけてしまった。もちろんそれもイメージ内での行為だが。

「……っ！」

ファンタム・サンが弾かれたように飛び退く。

「あー……悪い。今のは別にあんたを攻撃しようとしたわけじゃなくてだな……」

「……いいの、分かっているわ。先に手を出してしまったのは私の方だもの」

「話が分かる相手で助かる」

「でも女の子の素性をぶしつけに探るのはよくないわよ？」

反省してね？と言い残してファンタム・サンは姿を消した。質問に答えることなく逃

げやがつたな。

逃走したのは……西の方か。追いつけなくもないが、興味本意で尋ねただけだしそここまでして聞き出したいわけでもない。

ああいう厄介事が服を着て歩いてるような奴と関わると大概ろくでもないことになるだろうしな。

俺は制服の内ポケットからスマホを取り出して救急車を呼んだ。

足元で伸びてる男を放置するわけにもいかないからな。

納豆と謎

鉄は熱いうちに打て、ということわざの意味は今さら説明するまでもない。そしてそれは人の熱意にも同じことが言えると思う。

要するに身につけたいことはやる気がある時にやつとけ、つてことだ。

「異、どうしたんだよその弁当」

昼休み。いつもの2人と学園の食堂で昼食をとる。

いつもと違うのは俺が学食のメニューを注文するんじやなくて弁当を持参してることだ。

「最近料理を始めたんだよ」

といつても本当につい最近だし、まだまだ簡単なものしか作れないけどな。

ただ、やってみると意外に面白いのは新たな発見だつた。もつと早くに始めてれば

……つて言えるような状況じやなかつたか。

「自作かよ。彼女のお手製じやなきやいいや」

「俺らに黙つて彼女作つてたら市中引き回しの刑だからな」

何その取り決め。初耳だわ。

「じゃあ彼女できてもお前らには教えないし彼女の友達とかも紹介しねーわ」

「紹介してくださいお願ひします」

即座に下手に出るあたり必死さがすごい。

川神学園にはイケメン四天王がいるおかげで女子が男子に求めるハードルが高くなつてきらいがあるからな。

特に四天王のうち3人が2年生にいるつてのも大きい。その上3人ともフリーときたもんだ。

そのせいで他の男子には見向きもしない女子がことのほか多い。

……まあ2—Sの葵冬馬あおいとうまに関しては特定の相手がいないだけでかなりの数の生徒（男子も含む）に手を出してるらしいが。

などとくつちやべりながら箸を進めていると、学食に納豆の行商人が現れた。

「なっ、どうつ！」

というかけ声と共に納豆をあらゆるものに振りかける。行商人というよりは通り魔的な犯行なのだが、これが意外と人気だつたりする。

松永納豆自体の味はもちろん、納豆つてのは色んなものに合うらしい。まあ好評の1番の理由は押し売りしてくる松永先輩が可愛いからだろうけど。

さすが地方の「当地」とはいえ納豆小町としてアイドルやつてゐるだけのことはある。

「納豆一、納豆はいらんかねー?」

「はい!買います!」

「俺も!」

そして案の定というか、同席していた2人は松永納豆を購入した。こいつら上客だからな。

「ありがとう。いつも買ってくれる君達にはサービスしてあげるねん」

サービスはもちろん納豆だった。まあ1パック分の料金で2パック買えるならお得ではあるが。

しかしほまあよく顔を覚えてるもんだ。こういう細かいところが商売繁盛の秘訣なのかも知れない。

「君はどう?」

「今日は遠慮しどきます」

当然のように同席している俺にも声がかかつた。

が、丁重にお断りしておく

「んー、残念……って、おや?君は確かあの時の……」

「どこかで会いましたつけ?」

ちよつとすつとぼけて様子を窺う。

「あれれ、忘れちゃった？この前梅屋で強盗事件があつたじやない」

「……ああ、そういえばあそこに松永先輩もいましたね」

「そうそう。こんなに簡単に忘れられちゃうとちよつとショックかも」

「そう言う松永先輩の表情に悲しみの色は全くなかった。」

「強盗と川神先輩のブラックホールが強烈すぎてそれ以外の記憶が曖昧なんですよ」

アホみたいなセリフだが、強盗が押し入ってきた時に川神先輩は本当に小型のブラックホールを作つて犯人をどうにかしようとしていた。

たぶん鬪気を圧縮して擬似的に極めて高密度の物質を作つたんだろう。

結局それが犯人に向けられることはなく、しかし何かを吸い込まないと消せないとのことだつたので釈迦堂さんが店のゴミを投棄して事なきを得た。

普通の人間からすりや衝撃的すぎる光景である。

まあ正直などころ驚きよりも便利だなつて思つてたけど。独り暮らしはゴミを出し忘れてるとすぐ部屋に溜まるからな。

「おい異、お前どこで松永先輩と知り合つたんだよ！」

友達が小声で叫ぶという器用な真似をする。まあそれ松永先輩にも聞こえてるけど。というか知り合いつてほどの仲でもないんだが。

「実は異くん、バイト先で松永納豆を扱えないかお店に掛け合つてくれたんだよ。ね?」

松永先輩がさらつと嘘をついた。

そんな事実は一切ないが、これに乗つかれば面倒な追求は回避できる。そういう意味でも先輩が助け船を出してくれたのは間違いない。

ただまあ後でこの嘘を事実にしなけりやいけないんだろうけど。

「松永先輩が言つた通りだ。店長にサイドメニューに納豆はどうですかって勧めたんだよ」

了解しました、という意味を込めてそう言葉を返す。松永先輩は満足そうに頷いていた。

友達も俺のバイト先を知つてゐるのすんなり納得してくれた。

「興味無さそうにしておいて、まさか異がそんは点数稼ぎをしていたとは……!」

「先輩、俺もそれくらいやりますよ!」

「本当? 君はどこかにツテがあるのかな?」

なんか唐突に食堂の一角で商談が始まつた。松永納豆の普及活動がどんどん進んでいくなあ。いずれ川神全土を支配しそうだ。

とりあえず俺は一足先にその場から離れる。その際に「君にもサービスしてあげる」と言つて3パック入りの松永納豆を渡された。

これでバイト先に売り込んでこい、ってことだろう。本当にどこの世界でも商人というのは逞しい生き物だ。

そのまま自販機で飲み物でも買つてから教室に戻ろうと窓際の方へと足を向ける。するとそこでも見知った顔に会つた。

黛さんが女の子と一緒に食事をしている。あれが1人目の友達だろうか。

「あ、小篠先輩」

「やあ黛さん、こんにちは」

声をかけられてしまつたので素通りするわけにもいかず返事をする。

「あの、私はまゆっちの友達で大和田伊予つて言います」

「俺は2年的小篠異だ。黛さんの友達同士つてことでよろしく」

「はい」

いい笑顔だった。大和田さんは黛さんとは違つて社交性が高そうである。

あいさつだけにしようと思ったが、大和田さんに席を勧められたので座つていくことになつた。

「小篠先輩もお昼ですか？」

「もう食べ終わつたけどね。ただ一緒に食べてた友達が納豆の奴隸になつちやつたから俺だけ脱出してきた」

納豆という単語に2人は何があつたのか察したような顔になる。

「そういう小篠先輩も買ったんですか？」

「これは試供品だな。販路拡大のために渡されたんだ」

なんて会話から始まつて俺のバイト先や黛さんのクラスでの様子についてダラダラと話す。普段から一緒にいる大和田さんが潤滑油になつてか黛さんもいくらか口数が多く喋れていた。

「ところで先輩、つかぬことをお聞きしたいのですが……」

昼休みも佳境。そろそろ解散しようかと思つていたところで、大和田さんはやけに真剣な顔でそう切り出した。

「何さ」

「ノビのある直球でお尋ねしますが、先輩は野球に興味とかありますか？」

「あるよ。ニワカだけどサツカートかよりは野球の方が好きだし」

「本当ですかっ！……ち、ちなみにセとパのどちらが好きですか？」

「せだね。俺は七浜出身だから七浜ベイのファンなんだ」

これは本当の話だ。元から生まれは神奈川だから七浜……といふか横浜の球団はねるくだけど応援していた。

だから不動の4番に座る漢や天才の右バッターが未だにベイに在籍していることに

違和感を覚えてるけど……。

この2人もそのうち巨仁とハードバンクにFA移籍するのかもしねない。

「ぐつ！」

それはさておき。

なんだろう、大和田さんの瞳がめっちゃ輝いている。

もしかして彼女は熱狂的なベイファンだつたりするんだろうか。そういうえばいつだつたかカープ女子つて単語が生まれたくらいだし、最近は若い女の子が野球観戦に足を向けてるのかもしれない。

「こ、小篠先輩！」

テーブルを挟んでいる大和田さんがずらずずいっと迫ってくる。

「私もベイの大ファンなんです！な、なのでもしよかつたら私と野球を観に行きませんか！」

唐突な申し出。とはいえ七浜ベイの本拠地は隣街だし、電車に乗れば十数分の距離だ。

そう難易度の高いお誘いじゃない。……あくまで距離にに関しては。

「俺と？選手の名前とか半分以上知らないような奴と行つて楽しいかな……」「関係ありません！誰だって最初はそうなんですから！」

大和田さんの圧が凄い。見れば黛さんもハラハラして見守つてゐる。

……まあ彼女がここまで言うんだから知識云々は気にしなくていいんだろう。後は俺の気持ち次第だな。

「なら行こうか」

「本当ですか?!」

「ああ。観ながら色々教えてよ」

「もちろんです！」

「そうだ、黛さんも一緒にどう?」

「わ、私もですか？」

いきなり話を向けられて黛さんは慌てふためく。

態度には出してないけど数少ない友達が自分を置いて遊びに行くのは寂しいもんなんじやないのかね。

「い、いいんでしようか……?」

「そこは大和田さん次第かな」

少し意地悪く笑いながら大和田さんに託す。

俺は構わないよ、という合図だ。

「うう……私ペイの応援になると人が変わっちゃうから、それをまゆつちに引かれたら

……

「だ、大丈夫です！私はそれくらいで伊予ちゃんを嫌いになつたりはしません！」

「そうだぜ。オラのことを受け入れてくれたんだ、その程度で引いたりするもんかよ」

「まゆっち、松風……」

どうやら女の子2人と九十九神の絆がいつそう深まつたようだ。

我ながらいい仕事をしたな。

とりあえず今週末は後輩の女の子達と野球観戦に行くことになつたのだつた。

小篠翼。2年C組、出席番号6番。

5月4日生まれ。身長176センチ、体重65キロ。血液型A型。

学内テストの順位は70位前後。

あまり目立つタイプの生徒ではないが、クラス内では年に見合わない落ち着きからか
様々な相談を持ちかけられことが多い。

部活や委員会には所属しておらず、金柳街の梅屋でアルバイトをしている。
「……学園内で手に入れる事のできる情報はこれくらいかしらね」

こうした情報から浮かび上がつてくる小篠翼の姿は普通の生徒と言う他にない。でもあれは……私の放つた殺氣をいなして反撃してきたという事実は残っている。

偶然もあり得ないことだつた。

問題は経歴からそれだけの実力を持つてゐるなんて計れないこと。だからお父様に協力してもらつて学園生になる前のことを調べてもらつたのだけど。

「……七浜市の児童養護施設出身。両親は所在も生死も不明。そして小篠翼が育つた施設は彼が巣立つたのと同時期に潰れ、今や影も形もない……か」

さらに児童養護施設で育つたとされる彼以外の児童の行方が一切つかめない。これはどう考えても異常ね。

書類上では10人以上いたはずなのだけれど。

児童の受け入れ先となつてゐるはずの家は存在せず、近隣の住民もそんな家は知らないと口を揃えているらしい。

そして施設の関係者の行方も誰一人として分からぬ。

極めつけは小篠翼が卒業した小中学校。記録としては在学してゐたはずなのに、彼の同級生にあたる人物は誰も彼のことをはつきりと覚えていない。

いたような、いなかつたような……。誰しもがそんな曖昧な返答しかしなかつたとお父様から聞いた。

果たしてそんなことがあり得るのかしら？

いくら目立たない人間だからといって誰の記憶にも残っていないなんて……。

「そんなものはもう、存在していなかつたのと同義かもしれないわね」

小篠翼。明らかに壁を越えている実力を有しながら、その詳細はいくら調べても不明なことばかり。

まるで突如としてこの世界に現れた、世の理から外れたような男の子。

貴方は私への試練となるのかしら。

楽しみにしているわよ、翼。

ファンタム・サンとしてではなく、もがみあき最上旭ことわりとして出会うその日を。

もうすぐ、会いに行けるから。

九鬼のメイド

風間ファミリーには金曜集会というものが存在する。

廃ビルを根城——秘密基地にして時には楽しく語らい、時には全力でだらけて、時には文句を言いながら勉強し、時には真剣マジになつて遊ぶ。そんな集会だ。

だからファミリーはこの金曜集会に関しては可能な限り参加するようしている。そんな中で姿が見えない奴がいればまあ当然気にはなるわけで。

「あれ、今日はまゆつちいないの？」

空いてるスペースでトレーニングしていたワン子がまゆつちの不在にようやく気がつく。

「今日は遅くなるつてさ。友達と野球観に行つてるんだつて」

「ほほー、まゆつちもファミリー以外の交遊が広がつてきていい感じだな」

「でもなんで野球？C組の小篠くん……だつけ？彼が野球好きとか？」

「いや、まゆつちから聞いた話だと大和田さんっていう1年の友達が七浜ベイのファンらしくてさ……」

その子が同じくベイを応援してゐるという小篠を野球観戦に誘つた。そして小篠はそれを受けて、かつ一緒にいたまゆつちも行こうと提案したらしい。

「自分が孤立しないように気をつかつてくれたつてまゆつちが言つてたよ」

「まあ確かに自分の友達が自分を置いて遊びに行つていたらちよつと悲しいな」

「友達が少ないまゆつちは特にそうだよね」

「なるほどなあ。大和もそうだけぞやつぱりそういう気をすぐ回せる人は凄いなつて感心するよ」

「俺は……どうだろう。男同士ならまだしもほぼ初対面で学年も違う女子を相手にそこまで積極に動けるかどうか」

俺は基本的にギブアンドテイクの関係だ。社交辞令で一緒にどこかに行こうよ、という話の流れになることは多々あるが、実際にそこまで話が進むことは案外少ない。

単純に遊ぶだけにしてもほとんど面識のない年下の女子を2人と、となるとかなりハードルは高いしな。

「てかそれって小篠の野郎が女2人侍らせてるつてことだろ？ やつぱ俺様の敵だぜ」

「どつちも年下だしガクト的には守備範囲外だろ？」

「だとしてもだ！ 男として相容れねえ」

「はあ……しょーもな」

京がガクトの主張を一刀両断にする。

過去に肉布団だのなんだのとハーレムを語っていた男が口にすると単なるひがみにしか聞こえなかつた。

「しかしその話を聞いているとその小篠とかいう男は女性に慣れていそうじやないか。本当に大丈夫なのか？」

「それはまあ、あまり心配はいらないだろう」

すると意外なところから反論が飛んできた。

「モモ先輩？」

「皆にもこの前梅屋で強盗に鉢合させたつて話はしだらう？」

「おー、あれな。タイミング悪すぎて犯人が可哀想だつたやつ」

うん、あれは間違いない地獄の釜に自ら飛び込んできたような所業だつた。

「その梅屋で小篠つて奴もバイトしてたんだ」

「え、そうなの？」

「ああ。そしてあいつは私や燕、それにまゆつちという美少女軍団を前にしても視線が全く泳がなかつた」

姉さんが言うには男の視線は多かれ少なかれ胸やお尻、足などに向かつているらしい。特に同世代であればほぼ確実にそういうたどころを見てしまうものだと経験則か

ら語る。

「だけどあいつの視線にそういったものは皆無だつた。私達のことを異性として一切見てない」

「それってつまりキヤツプレベルってこと?」

「そうだな。さすがにキヤツプほど純粹ではないだろうけど、それであそこまで無関心なのは逆に驚きだ」

確かにファミリー内の女子相手でもふとした時に視線が吸い寄せられることは多々あるので姉さんの指摘はドキッとさせられる。

けどそういう実感があるからこそ、それに釣られない小篠の異質さ、みたいなものを感じた。

「……もしかして男が好きとか?」

「それならばまゆつちは安全だな」

俺がなんとなく放った呟きにクリスが反応する。

「それは知らんが女に見境のないタイプではないだろう」

「モモ先輩がそこまで言うとは珍しい」

「基本、モモ先輩は可愛い女の子の話しかしないからね」

「うーん……男としてどうこうはないけどな。ただ、多少気になることはある」

「ほう、どの辺が？」

「あいつは強盗はもちろん、私やヒュームさんを間近にしても臆している様子がなかつた。普通なら怖がつたり気圧されたりするものなんだが」

言われて思い返してみれば、確かに小篠は普通に注文をとつて普通に配給していた。ヒュームさんなんか気とか感じ取れない素人でも威圧感や凄みを覚えるものだけだな。

「つまり小篠はつえーってことか？」

「いや、それはない。気はほとんどないし体の動かし方を見ても一般人そのものだつた」

「それってただ鈍感なだけなんじゃ……」

「まあそれもあり得る」

「そんなあつけらかんと……。

でも姉さんの直感だ。常人を超越した武神の感覚というのは馬鹿にできるものじやない。

小篠がどういう人間か、少し興味が湧いてきたな。

……断じて姉さんが興味を持つたことに対する嫉妬じやない。

「今日はありがとうございました！」

大和田さんが満面の笑みを浮かべてそう言つた。七浜ベイが試合に勝つたのでかな
り上機嫌である。

ハマの番長こと三浦……ではなく、三崎投手の好投で勝つたのもテンションが上がつてゐる一因だろう。

七浜ベイはお世辞にも強いチームとは言えないからな。川神駅まで戻つてきても大和田さんはニコニコだった。

「こちらこそ色々教えてもらえて面白かつたよ」

大和田さんの豹変も含めての話だ。特に7回表ツーアウト2、3塁のピンチで三崎投手が相手の4番を三振にとつた時の応援は凄かつた。

まあ意外な一面が見れた、つて程度で引いたりはしてない。それは黛さんも同じ意見だろう。

「私も楽しかつたです。また行きましょう、伊予ちゃん」

「まゆつち……うん！」

なんかもう親友みたいだな。友達100人なんて作れなくとも、大和田さんがいればいいんじゃない？

直江とか川神先輩とも仲良いみたいだし。

「もういい時間だし、今日はこれでお開きにしようか」

「あ、そうですね。もうこんな時間」

「では帰りますよ。途中まで送つていきますよ、伊予ちゃん」

「俺は反対側だからここでお別れかな。2人とも気を付けて帰つてね」

黛さんと大和田さんはしつかり「はい」と頷いて帰つていった。護衛に黛さんがいれば滅多なことは起きないだろう。

この川神でも黛さんより強い人間は数えるほどもいない。だからこれといつて心配することもなく帰宅しようとしたんだけど……。

「よお兄ちゃん、ちよつと金貸してくんない？」

「大人しく貸してくれれば俺らも優しくしてやるからさ」

駅前から離れて人通りが少なくなってきたところで2人組の、いかにもヤンキーな奴らに絡まれた。まさか俺の方にアクシデントが起きるとは。

俗に言うカツアゲつてやつだが、こんなステレオタイプなヤンキーが未だに生息しているのも川神特有の生態系と言える。

ただこういう手合いは治安が悪い親不孝通りにいるはずなんだけどな。

「お金はちょっと持ち合わせが……」

「ああん!?

「ナメてんのかコラア！」

やかましいし顔が近い。やたらと興奮してるしやんわり断つて退散とはいかないみたいだな。

いやまあここでビビつてみせれば逆上することはないんだろうが、問答無用で殺しにくる理不尽な奴らと比べてしまつてどうしても余裕をもつて対応してしまう。

あいつらに比べれば戦闘狂の川神先輩だつて微笑ましく思える。

だからといって構つてやるつもりもない。ここは逃げる1択……なんだけどなあ。

こいつらに絡まれた瞬間から感じられる視線がある。その視線の持ち主がしつかりとここに向かってきていた。

間違いなく一般人じやない。

俺の存在を認識させなくすることもできはするが、さすがにそこまでするのは抵抗があつた。

なので俺はアクションを起こすことなく視線の主を待つ。

そして現れたのはピンクの髪にメイド服、さらには猫の尻尾を装備した奇抜な格好の女性だつた。

「はいはーい。ちよつと待つた、でーす！」

「おお!? お姉さん可愛いじやん！ 俺らと遊ぼうぜ」

服装をガン無視してノータイムでナンパを試みる節操のなさはいつも清々しい。

だが南無三。そのお姉さんは格好だけじやなくて中身も普通じやないぞ。恐らくは

いくつもの戦場を経験してる本物の兵士だろう。

そこら辺のヤンキーが束になつたところで敵う相手じゃない。

なんて哀れみの目で見ているとヤンキー達がばつたりと倒れた。いきなりすやすやと眠り始めたようだ。

……薬かな。なんか体から薬物を発生させたように見えたんだけど……。

「大丈夫ですか？」

「あ、はい。危ないところを助けてくれてありがとうございます」

「イエイエ、これもシェイラちゃんのお仕事ですから」

にこやかにそう言つたシェイラさんは、しかしあまり目は笑つていなかつた。どうやら観察されてるらしい。

「それにしてもあまり慌てていたようには見えませんね」

「まあ慣れてるんで」

「あんなのに絡まられることすら慣れるなんて、話に聞いていた通り川神はデンジヤラスな街ですね☆」

一応納得はしてくれたようだ。

それについても外見と話し振りからして海外からやつたきた人だろうか？ 海外、メイド、戦闘能力ありとなると……。

「シェイラさんは九鬼財閥のメイドなんですか？」

「はい。武士道プランの関係で今は川神の治安を守るための警備中なんでーす」

ああ……義経達への挑戦者が大挙してきて、お祭り騒ぎが大好きな川神の人間も浮か
れ気味だもんな。

それで何かしらの事件でも起きれば九鬼のメンツにも関わってくるか。

「大変ですね。でも仕事つてことはお礼とか……」

「残念ながら受け取れませんねえ」

「ですよね」

知つてた。でもこういうのはしつかり口に出しておかないとな。

本音を言えば九鬼のメイドに関わりたくないけど、そういう露骨な態度を見せると逆
に怪しまれるし。

これくらい普通の対応をしておいた方が無難である。

「それではシェイラちゃんは彼らを連れていきますので。あなたも気を付けて帰つてく
ださいね☆」

そう言い残して、シェイラさんは2人組のヤンキーをずるずると引きずりながら消え
ていった。

……九鬼従者部隊のシェイラさん、か。あそこも人材の宝庫だけあって厄介な人が多
そうだな。

義経達が転入してきてから俺の周りも少しずつ慌ただしくなってきたような気もするし、より一層目立たないよう、善良な一生徒として生きていこう。改めてそんな決意をする、6月の夜だった。

強襲

川神学園の体育祭にはいくつか種類がある。去年は学園を飛び出し、海まで出向いて水上体育祭が行われた。

その名称の通り水や海にちなんだ競技が目白押しで、なんとも川神学園らしい体育祭と言える。

そして今年は通常の、学園のグラウンドで行う体育祭に決定した。借り物競争で黛さんが松風連れてゴールして怒られたり（あとで聞いたらお題は『友達』だった）、教師陣による徒競走というちょっと珍しい競技もあつたりしたが、まあここまで普通の範疇だろう。

だがしかし、やつぱり川神学園は川神学園だつた。体育祭の最中に『川神戦役かわかみせんえき』なるものが開催された。

早い話が特定のクラスが1対1で5番勝負を行い、3勝した方が勝ちというクラス単位の対抗戦である。

そうなると戦う2クラス以外の人間はヒマになるのだが、ノリのいい学園の生徒は一

進一退の川神戦役に声援や野次を飛ばして大いに盛り上がっていた。

ちなみに戦つたのは2—Sと2—Fであり、延長戦までもつれた末にF組が勝利した。

義経達やドイツ軍人がいるS組が有利と目されていた中でよく勝ちを拾つたもんである。

その勝因になつたのは延長戦で九鬼のメイド相手に見せた直江の踏ん張りだろう。まあそんなこんなで今年の体育祭もつつがなく終了した。

そして日曜日を挟み、明けて月曜。6月29日、学園はまだ少しだけ体育祭の熱気と疲労を引きずつていた。

「あ、一、授業だつりい……」

「なんかいつもより長く感じね？」

「体育祭明けだからな。2、3日後には慣れてるだろ」

クラスのそこかしこで似たような会話が聞こえてくる。要するにまだ切り替えができてないってだけのことだ。

授業を受けてれば嫌でも治るさ。

何はともあれこれで今日は終わりだ。バイトもないし、放課後はどうするかな。

……なんて考えていた時だった。

「うお!?」

「な、なんだ今のは?」

「背筋がゾクツとしたぞ……」

クラスメイト達が急にざわめき始めた。その理由は明白。

学園内に突如として壁を越えた人間が現れ、さらにその鬪気を全開にしたからだ。
壁越えの実力者がそんなことをすれば武道に疎い素人でも異変を察知することがで
きてしまう、つてわけだ。

つーかこの気に俺すっげえ覚えがあるんだけど……。

覚えがあるつていうか、完全にファンタム・サンと同じ氣だった。あいつなんで学園
にいるんだよ。まさか学園生だったのか……?

「……それヤバくね?」

小声で、しかし思わず声が漏れた。

いやヤバいって。俺ファンタム・サンに顔見られてるんだけど。しかも相手の殺氣を
斬り伏せて逆に脅しかけちやつてるし。

「おいテレビ、テレビつけてみろ!」

俺がやつちまつた!と後悔している間にも事態は進展していく。

廊下からそんな声が聞こえてきた。そのただならぬ様子に、とりあえずテレビをつけ

る。

そこには九鬼の関係者らしき男が映し出されていた。そして男はこう語る。

『私達、九鬼財閥は5人目のクローンである源義仲を愛すべき皆さんにご紹介する』

この気がファンタム・サンのものなら、やっぱりあいつクローンだつたんだな。

そしてクローンってことは九鬼関係者であることが確定しているわけで、ファンタ

ム・サン改め源義仲から俺のやつたことについて報告が上がつて来るかもしれない。

警戒されて監視とか尋問とかされたらどうしよ……？

『木曾義仲の名でも知られる名将ですね。しかしなぜ今になつて5人目の発表を？あの4人が全てではなかつたのですか？』

『話題の継続だよ。本当ならば毎日だつて世間を賑わせたいくらいだ』

そんな理由のせいで俺は九鬼に警戒されるかもしれない地雷を踏んだのかよ。

『5人目は私の養女として日常生活を送つている。クローン達が社会での生活を適切に送れるかどうか前もつてチェックしていたんだ』

だとしたら不適切じやない？ ファントム・サンとして世の武道家をボコして回る活動してるけど。

あれにも何か意味があるのかね？

『発表されたら周囲の人間は驚くだろう。でも同時にどこか納得もするはずだ。ああ彼

女が、道理で不思議な魅力があつたな、と』

『養女ということは女性なんですね?』

『もうすぐここに来てもらうけど、名前をまずは公開しよう。最上旭。現在、川神学園に在籍している3年生だ』

男が口にした名前にクラス中の人が騒ぎ出す。

最上旭。それは川神学園評議会議長の名前だつたからだ。

評議会つてのは生徒会を補佐する組織である。生徒会が学園の表の顔だとするなら、評議会はその生徒会を裏から支える縁の下の力持ちみたいな役割を果たしている。

現職の生徒会長が日本語いまいちの骨法少女なのにも関わらず学校行事が円滑に執り行われているのは評議会の存在が大きいからだ。

というかこれでファンタム・サンが学園の生徒だつてことが確定したじゃねーカ。

できれば俺のことは忘れててくれる助かるんだけどなあ……。なんて途方に暮れ

ていると、未だに騒然としている教室の扉が開かれた。

そして入ってきた人物を見て、まるで時が止まつたように静まり返つた。それもそのままはず、現れたのは話題の渦中その人だつたからである。

最上先輩は呆気に取られる俺達を見回す。そして俺と目が合うと真っ直ぐにこっちまでやつて来た。

そうなればクラスメイトの視線も俺の方に集中する。

「ここにちは」

しかしそんな周囲の空気など気に留めることもなく、最上先輩は優雅にそう挨拶してきた。

まあそこまではまだいいんだけど、何よりも帶刀してらつしやることが気にかかる。この場で斬りつけてくるとかさすがにないよね？

「……ど どうも。はじめまして」

とりあえず初対面だつてことをアピールしてみた。

「ええ、はじめまして」

……あれ？ もしかして俺のこと覚えてない？

「ところで翼、あとで少しだけ時間をもらえないかしら？ ゆっくりと話をしたいのだけど」

あ、これは覚えてますね。はいはい、知つてた知つてた。

話つてのは……まあこの間の件についてだろう。

もはや逃げられないと悟り諦めの境地に達した俺は、最上先輩のお誘いに力なく頷くことしかできなかつた。

ついこの間、目立たずに生きていこうと決意を新たにしたばかりなのに、それが早く

も崩れ去つちまつた瞬間である。

「いらっしゃい。ここが私の家よ」

「はー、さすがに立派つすね」

私が正体を明かしたその日の夜。

翼は意外と素直に誘いに乗って私の家まで招かれてくれた。
けれどそこに浮かれた様子はなく、かといってこちらを警戒している素振りも見せない。

「褒めても何も出ないけれど」

「お茶くらいは出るでしよう」

そう、こんな言葉を返せるくらいには余裕があつた。

確かに落ち着きのある子だという情報はあつたけれど、それにしたつて落ち着き過ぎじやないかしら？

なんて疑問に思いつつもそのままリビングへと翼を通す。

「おや、お友達かい？旭」

「ええ、学園の後輩なの」

「はじめまして、小篠異です」

「ふむ……ようこそ小篠くん。養父の最上幽斎もがみゆうさいだ。歓迎するよ」

「ご飯の仕度をするからそれまで男の子同士でお話していくね」

「お茶どころかご飯まで出るじやないっすか」

「それはどういう意味なんだい？」

「実はさつき最上先輩に——」

結構なキラー・パスを出したつもりなのに、異は臆することもなくお父様と会話を始める。

いきなり異性の先輩の家まで招かれ、そこで先輩の父親と2人きりにされても平然としているなんて大したものね。

まあ私を異性とは認識していない、という可能性もあるけれど。

なんというか、掴み所のない子だわ。

そんな風に感心しながら料理に取りかかる。まあ今日は慌ただしくなることを見越して昨日の内に手間がかかる部分は終わらせておいたから時間はかかるないのだけど。手早く仕度を済ませてリビングへと戻る。

「へえ、じやあ九鬼の人達にも最上先輩のことは秘密だつたんですね」

「愛する九鬼の皆へ試練を与えたくてね。おかげで今日はそれについての説明に追われて大変だつたよ」

「納得はしてもらえたんですか?」

「帝様は寛大な方だからね。私の言い分もご理解してくれた」「懐が広いというかなんというか……」

ほんの30分ほど離れていた間に、お父様と異はだいぶ打ち解けているようだつた。私もその輪に加わることにした。

「あら、私のお話かしら」

「最上先輩が九鬼にも秘密にされてたつてのは聞きましたよ。あと義経のライバルとして誕生したつてことも」

「生まれながらにして英雄という肩書きを背負うことになる義経が心配でね」

「それでクローンをもう1人——つてなるスケールの大きさはさすが九鬼つて感じだなあ」

食事をとりながら和やかな雰囲気で談笑は続く。

巽は会話の合間にも言いながら料理を口に運び続ける。

「私はこれから義経と競いあつていくつもりよ」

「それは武将として?」

「そうね。でも競うのは戦いだけじゃないわ。もつと色々な分野でお互いを高めあつて、人間として成長していきたいの」

「すごくいい話じゃないですか」

「なら異には義経との勝負の見届け人になつてもらおうかしら?」

「俺がですか?ムリですってそんなの」

「あら、私はそう思わないわよ。なにせ私の斬撃を弾き返したくらいだもの」「それはあくまでイメージの中ででしょ。というか戦い以外の勝負じや俺にはどうしようもないです」

「……誤魔化しもしないのね」

「ムダなことはしない主義なんで。人生諦めが肝心つて言葉もありますからね」
顔色ひとつ変えることなく、食事をしながら事も無げに異はそう返してきた。
バレてるなら隠さない、というのは剛胆で個人的には好印象ね。

「なら貴方の強さの秘密も聞いたら教えてくれるのかしら?」

「そこは黙秘で」

「秘密にされると余計に探りたくなるのが人の心情というものよ?」

本音ではあるけれど、ほとんどからかうつもりでそんな言葉をかける。
すると異は真剣な顔つきで悩み始めた。

「ですよねえ……でも九鬼の人、特に上層部の人達には知られたくないんですよ」

「私とお父様の心の中だけに留めておく、と言つたら？」

「その言葉を信ずるに値する信頼感はまだないですね」

「はつきりとものを言うのね」

「最上先輩こそ分かりきつて尋ねてきてるじゃないですか」

「……平行線ね。まあ私としてもそこまで素直に教えてくれるとは思つていなかつたけれど。

そこで私達のやり取りを見守つていたお父様が口を開く。

「小篠くん、君は今『九鬼の上層部には特に知られたくない』と言つたね？つまり君は九鬼にとつてよろしくない秘密を抱えているということかい？」

「そこは俺にも分かりません」

「分からぬい、とは？」

「俺の秘密を知つた時に九鬼がどんな判断をするのか想像がつかないんです。危険視して排除しようとするのか、不干渉を決め込むのか、利用するために取り込もうとするのか

その言葉が意味するところは計りかねる。

でも適当なことを言つて煙に巻こうとしているわけでもなさそうね。

「君にはそれだけ危険な秘密があると？」

「それを判断するのは俺以外の人ですからノーコメントで」

「……そう。なら無理やり聞き出すのは野暮というものね」

「俺が言うのもなんんですけどそれでいいんですか？」

「無理強いをするつもりはないの。それに九鬼がどうこうではなくて、これは単に私の興味本意だから」

「ええ……」

興味本意という言葉に異は脱力する。

よほど九鬼とは関わり合いたくないのね。そのわけは彼の秘密を聞かないと分からないけれど。

「それに信頼してもらえるくらい仲良くなれば教えてくれるのでしょうか？」

「あー……ところで最上先輩」

「話の逸らし方が露骨すぎないかしら」

「逸らしたわけじゃないんで今は置いといてください。それより先輩って誰かに狙われたりしてるとんですか？」

「そうね……確かに熱い視線を向けてくる男子に心当たりがないわけではないわ」

「んなことは聞いてないですよ。そうじやなくて命を狙われたり身柄を拘束されたりす

る心当たりつてあります?」

「今のところないわね。まあクローンという性質上、特定の宗教を信仰している人達からは快く思われてはいないでしようけど」

「でもどうしてそんなことを?と尋ねる前に翼は箸を置いた。

「敬虔な信者にしては殺気が洗練されますね。傭兵か殺し屋か、なんにせよ不穏な2人組がここを目指してます」

「ふむ……もしかしたらそれは私のお客様かもしねりないね」

不意にお父様がそう口にする。

「お客様という割りには友好的な雰囲気ではなさげですけど」

「無理もないさ。私は試練を与えたわけだからね」

「……納得しました」

翼が察したように言葉を漏らす。要するにお礼参りが来た、ということらしい。

私はまだその気配を察知できていないのだけど、翼は当たり前のように話している。

「それなりに手練れっぽいですけどどうします?」

翼はそう言つて私を見た。その言葉の意味するところは“助力はりますか?”といったところね。

彼の強さを窺うチャンスではあるけれど、さすがにそこまではさせられないわ。

「私が一人で相手をするから翼はお父様を守つていて」

「いいんですか？」

翼は意外そうに目を丸くした。それを見て少し笑いがこみ上げる。

強さの秘密をあんなに隠したがつてはいるのに、いざ危険が迫れば迷わず私を助けるために動こうとするのがおかしかった。

「貴方はお客様だもの。危ない目には遭わせられないわ」

これは本音。

彼は私の興味を満たすために呼び寄せられて巻き込まれたのだから、招いたホストとしてこれ以上不甲斐ないおもてなしをするわけにはいかないもの。

不届き者を追い返して、せめて最低限の体裁は保たないといけないわね。

愛刀を携えて中庭へと降りる。白玉砂利を踏みしめるとジャリ、という音を立てた。その音が闇夜に溶けるように消えていく。シン、と静まり返った空気が張り詰める。……翼が言っていた通りね。殺氣をまとった人間が近付いてきているわ。

そしてその2人は私の眼前に姿を現した。

どちらも剣を抜くのに値する実力者ね。普段なら喜ばしいところだけれど、今は望ましくないのよね。

「お前がM……ではないな？」

「ええ。まあその娘ではあるけど」

「ならばお前に用はない。そこを退いてもらおう」

槍を携えた黒髪の女性の瞳が鋭く細められる。その隣に立つ赤い髪の女性もすでに臨戦態勢ね。

「そういうわけにはいかないわ。お父様に手は出させないし、今はお客様が来ているの。だから今日は帰つてもらえないかしら？」

「……そうか。では問答無用で通らせてもらう」

言うが早いか槍を握った女性は一気に間合いを詰めて閃光のような突きを放つてくる。

それを刀で弾き、いざ反撃を――

「つて、きやあつ!?」

間髪入れずに赤い髪の女性も拳を見舞つてくる。それは威力も充分だつたことに加え、拳と一緒に炎まで飛んでくる。

一体どういう原理なのか、はたまた彼女の能力なのか。それを考えるヒマもないほど彼女達の攻めは苛烈で、防御に回つてしまう。

燃え盛る業火と雷鳴のような槍による連撃。しかも決して刀の間合いには入つてこない。

強さも、連携も、立ち回りも、間違いなくプロのそれね。
アレを使う隙が一切ない。

かといつてこのまま防御に徹していてもじり貧になるのは分かりきっているわ。向こうに増援が現れればすぐに抜かれてしまう。

異がいると思えばなんとかしてくれるかもしれないけれど、ここで彼を頼りにするわけにもいかない。

どうすれば……と、わずかに迷った瞬間。

炎が壁となつて私の視界を一瞬遮つた。まずい！

「せいっ！」

そう思つたのと同時に、炎の壁の向こうから槍が伸びてきた。

「くうっ!?」

槍による横薙ぎが左腕に直撃した。

鈍い痛みが走つて剣を取り落としそうになるのを堪えて距離を空ける。

「痛めつけたな。私はメインター・ゲットに向かう」

「させないわ！」

「お前の相手は私だ！」

私の行く手に黒髪の女性が立ち塞がる。

その隙に赤い髪の女性が私の横を通り過ぎ——ようとしたところで声がかかった。

「無理はよくないですよ、最上先輩」

「誰だ!?」

3人の視線を一身に浴びて、翼は肩をすくめる。

「ただの後輩ですよ。最上先輩の助太刀をしにきました」

「助太刀だと? 何をバカな」

2人の刺客はあきれたような表情を隠さない。

……まあ当たり前よね。初めて顔を会わせた時も、そして今も、翼には武人としての

“氣”がほとんどない。レベルとしては一般人のそれだもの。

その気を感じ取れる実力者だからこそ見抜けない。

翼の異質な強さを。

「……情けないところを見せてしまつたわね」

「数的不利はしかたないんじやないですか?」

まるで日常生活の中の何気ない会話のように、翼は飘々と受け答える。

そんな彼と反比例するように、2人組の雰囲気は剣呑なものへと変わっていく。

明らかな格下に……いえ、武術を学んでもいなさそうな男に舐められているのが屈辱なのね。

「それよりも早く終わらせましょう。まだ食事の途中ですし」

「お前……しばらく流動食になつても後悔するなよ」

「ついでに大火傷してもな！」

襲い来る隙のないコンビニーションによる一気呵成の攻め。

しかし翼はそれをいとも簡単に防いでみせた。

「え?」「は?」

何が起きたのか分からず……いえ、目の前で起きたことが理解できず、2人から戦闘中とは思えないような気の抜けた声が出た。

でも、それもそのはず。

翼が左手に持っていた“1本の箸”で槍による突きを受け止めたからだ。しかも素人だと思つていた子に、だ。その衝撃はいかばかりかしら?

コンビネーションが崩されたことで隙だらけになつた炎の剛拳を、翼は右手で驚掴みにする。そのまま強引に引き寄せて回転しながら体の位置を入れ替えた。これで挟撃してきた2人組の姿が重なる。

『紫電の腕』

そして翼はその一撃で2人を同時に撃ち抜いた。

そうとしか言いようがない。私の目にはその名の通り紫電のごとく振るわれた拳に

よつて2人まとめて吹き飛ばされたようにしか見えなかつた。

ただし“直撃していないはずの拳”で、なのだけれど。

結果だけを語るならまさに瞬殺。2人は完全に意識を手放したのか、重なつて倒れたまま動かない。

そんな相手を見下ろしたまま、翼は尋ねる。

「で、どうします? このお姉さん方」

「……九鬼の方でなんとかするわ。それよりも——」

今のは何?……とは聞かない。

もつと優先しなければいけないことがあるもの。

「火傷はしていない? 思いきり炎を掴んでいたけれど

「大丈夫ですよ。そんなに熱くなかったですから」

それが嘘だということは彼女と対峙していた私にはよく分かる。

……まあ異なら本当に大した温度じゃないと感じている可能性もあるけれど。

「でも制服は焦げてしまつたわね」

体は無事でも制服の袖口は一部が燃えてしまつていた。

この制服で登校したら確実に注意されてしまうわね。

「……」の人達に請求したら弁償してくれつかなあ」

「その心配は無用よ。私が新調してあげるわ」

「え？ でもそこまでしてもらう理由は……」

「あるのよ」

異の言葉を遮つて、私はニコリと微笑む。

情けなさや悔しさはあつたけれど、それでも素直に笑了かと思う。

「危ないところを助けてくれたお礼をさせて。助けてくれて本当に嬉しかつたわ」

そう言われて、少し恥ずかしそうに頬をかく異の姿は年相応の可愛らしさがあつた。とても慌ただしい会食になつてしまつたけれど、そんな彼の姿を見ることができた。それだけで満足してしまつた私がいる。

「でもよく助けてくれたわね。異は自分の力を隠したいのに」

「さすがに目の前で知り合いが痛めつけられてちやだんまりしてられませんつて。まあ隠せるに越したことないのは間違いないんですけど」

苦笑しながらそういうことをサラリと言える辺りお人好しの部類なのかしら。自分の利益を守るより相手の不利益を防ぐために迷わず行動を起こせるのはとても素敵ね。ふふ……まったく、我ながら単純だわ。

異。私はもつと貴方に興味を抱いてしまつたみたいよ。その武だけじゃなくて、男の子としても……ね。

不可解な一撃

6月が終わり、今日から7月になつた。2日前に最上先輩の家にお呼ばれしたところ、謎の襲撃があつて俺の制服が焼け焦げた。

それ自体は最上先輩が弁償してくれるし、もう衣替えで夏服になるからどうでもいいつちやいいんだが。

気になるのは最上家を襲撃した2人組だ。どう考へても戦闘を生業にしているプロの動きだつたが、なんでまたそんな奴らに襲われたのか。

九鬼関係で色々あるのかねえ。

なんて思案しながら自作の弁当をつつく。今日は学食じやなくて屋上だ。理由は最上先輩に呼び出しを食らつたからである。

まあ話の内容は大方予想がつくけど。

ガシャン、と屋上の扉が開く。そして梯から待ち人が顔を現した。

「ごきげんよう、翼。遅れてしまつてごめんなさい」

「良い場所教えてもらつたんでキャラですよ」

「燕のおすすめスポットなのよ、こゝ」

燕……ああ、松永先輩か。あの人転校してきて1ヶ月ちよいなのによくこんな場所見つけたもんだな。

ただ松永先輩のお気に入りなら不用意に近付くのは止めとこう。

さつき偶然にも死角になるだろう場所に、どこかの誰かが忘れていつたらしい盗聴器が、たまたま電源が入った状態で放置されていのを見つけたからな。

ちなみに壊すのも怪しまれるので盗聴器の近くにスマホを置き、その場のBGMとして不自然じやない音量で適当な曲を流し、会話の内容は聞き取れないようをしている。

ただ松永先輩の興味が俺に向いてるのか最上先輩に向いてるのか分からぬのが怖い。

「して、お話とは？」

「まずはこれ」

最上先輩が紙袋を手渡す。中身は真新しい制服だった。

仕事が早い。さすが議長。

「ありがとうございます」

「お礼はいらぬわ。むしろ謝罪と感謝をしないといけないのは私の方だもの」

「なら感謝の印を受け取りたいですね」

「あら、大胆ね。健全な男子の欲望を受け止めきれるかしら」

「というわけで俺のことは九鬼にも他言無用でお願いします」

「異はつれないわね」

「露骨なからかいには乗らないんで」

それだけ真剣な話だからというのもある。最悪、俺の異常性に気付かれるまではまだいい。でもその先にあるものまで勘付かれるのはよろしくない。

上位世界はムリだろうけど、その『入り口』くらいまでなら到達してしまえそうな人が川神にはいるからな。

川神先輩やヒュームくんはその筆頭だ。特に川神先輩なんかはそつちに行つてみたいとか言い出しかねないし、存在を認識してしまえば自力でたどり着いてしまうかもしれない。

しかし川神先輩でも『入り口』では生き残れないだろう。ビームを撃てようがブラックホールを形成できようが、ただ強いだけじや戦いにすらならない連中が犇めている地獄だからな。

秘密を隠しているのは俺の保身も目的ではあるが、同時に実力者を無駄死にさせないための配慮もある。

「まあいいわ。その条件、飲みましょう」

「助かります」

「当然それくらいは、ね。そうそう、昨日捕縛した2人は梁山泊りょうざんぱくの傭兵ようへいだつたわ」
そりやまたビッグネームが出てきたもんだ。つていうかこつちには梁山泊が実在してんのか？」

「その梁山泊つていうのは？」

「”歴史が動く時、その影に梁山泊あり”と言われるほどの中国の傭兵集団よ」「おつかないです」

最上先輩の反応からするに俺が梁山泊を知らないことを疑問に思つてる様子はない。つまり元の世界とは違つて梁山泊の名前はそこまで有名なもんじやないらしい。
少なくとも俺が知らなくても不審がられない程度には。

「でもなんで傭兵なんかに襲撃されたんですか？」

「お父様が梁山泊と、彼らが対立している組織に試練を与えたのよ。その逆恨みといつたところかしら」

「それ逆恨みじゃないと思うんですけど」

真つ当な復讐である。

それをいけしゃあしやあと“逆恨み”と言つてのけるあたり、最上先輩もなかなかに図太い。

「ああ、それとりつちゃんから伝言を預かつてゐるの」

こうして堂々と話を逸らすところなんかもな。

というか……

「りつちゃん？ 誰ですかそれ」

「林冲よ」

「いやだから誰……もしかして梁山泊の人？」

「ええ。黒い髪の槍術士がいたでしよう？」

不自然な動きをしていた方だな。あれは精度の高い先読み、もしくは少し先の未来が見えていた動きだった。

だからどちらにしても回避できないような攻撃をしたわけだが……。

「そのりつちゃんからよ。『あの攻撃は何なんだ？ 見えていたのに見えなかつた』ですつて」

やつぱり良い眼をお持ちのようだ。

ただまあそれに答える義務もないしな。

「黙秘権を行使します」

「まあそう言うわよね」

「あつさりと引き下がりますね」

「昨日も言つたけれど無理強いをするつもりはないの……今は、ね」

「最上先輩はそう言いながら意味深な笑みを浮かべる。

信頼感は“まだ”ない、って言葉は安易だつたかもな。あれを口実にがんがんアプローチしてきそうな気配を感じる。

それが純粹なものならどれだけ嬉しかつたか。

「それはそうとあの話は考えてくれたかしら？」

「あの話？」

「私と義経の競い合いよ。その審判をしてもらえないかつてお願いしたでしよう？」

「本気で言つてたんすか……」

それを受ける利点が俺にはない。

……と今の今まで思つていたが、このタイミングで切り出されるとそう断言するのにためらいが出てくる。

正確に言えば利点があるのではなくて要らぬリスクを回避するという意味で一考の価値があつた。

どうも最上先輩は俺が隠している秘密に執心している。それを聞き出すために俺と

の距離を縮めようとしてくるだろう。

ここで問題なのが今の最上先輩が大層目立つ立場の人だということだ。

接点の見えない、学年も違う有名人に構われるモブ男子。周囲からすると俺の立ち位置はそうなる。

同級生にやつかまれるだけならいい。

だが木曾義仲という正体を晒した直後から親密にし始めた謎の男子として、各勢力から注目を浴びる恐れがあつた。

だが競い合いの審判に巻き込まれた、という言い訳を隠れ蓑にしていればその恐れもいくらか低くなるかもしれない。

「もちろん異にだけやらせるつもりはないわ。せめてもう1人くらい誘うから貴方だけが目立つ、ということはなくなる」

「一番穩便なのは最上先輩が俺に近付かないことだと思いますけど」

「それは無理よ」

あつさりきっぱり言い切られた。無茶苦茶だよこの人。

暗に“九鬼や川神院に興味を持たれたくないれば言うことを聞いて”、つてことだろう。正直最上先輩に目をつけられた時点でもう手遅れ感が半端ねえけど。

……ファンタム・サンに出会ったのが運の尽きだつたのかもしれん。
立ち回りミスつたなあ。

氣を張つてはいたつもりだつたけど、知らず知らずの内に緩んでたと言わざるをえな

い。

緊張感を維持するには川神はお気楽で、安全で、平穏すぎた。今回の件は脇の甘さが招いた俺の責任か……。

「ああ……分かりました。審判くらいなら受けますよ」

「ありがとう異。嬉しいわ」

最上先輩はその言葉に違わぬ笑みを浮かべる。

ほんと、これでめんどくさい事情さえなけれやもつと楽しい未来を想像できんだけどねえ。

「む、戻ったか」

「ただいま、りつちゃん」

「……そのりつちゃんというのは止めてくれないか？」

「いいじゃない。可愛いでしょ？」

「そういう問題ではなくてだな……」

自宅に帰ればりつちゃんと林冲がリビングでお茶を飲んでいた。私はそこに相席して一緒にティータイムを楽しむことにする。
「ところでまつちゃんはどこに行つたの？」

まつちゃん、というのは武松のあだ名。女の子のあだ名にぶーちゃんはちょっとね、

という配慮の末にそうなつた。

まあまつちゃんならそういうことはあまり気にしなさそうではあるけれど。

「仲間が泊まつてゐるホテルだ。説明が電話だけだつたからな」

「意外ね。そういうのはりつちゃんの役目かと」

「……仲間の中に武松に懐いているのがいてな。顔を見せに行つたんだ」

「ふーん。なら貴女も一緒に行つたらいいじゃない」

「私と武松は一応軟禁されている身だ。そこまで好き勝手に動くつもりはない」「義理堅いのね」

軟禁、といつても出ようと思えば出ていけるようにはなつてゐるのに。

そもそも話を聞きたかつたから昨日一日は滞在してもらつただけで、別にもう帰つてもらつても構わないのだけれど。

「むしろそちらが手緩いと思うのだが。私達はMを、旭の父親に危害を加えようとしたんだぞ?」

「そのお父様が問題ないと言つてゐるのだからいいのよ」

お父様がああ言うということは解決する手段があるということ。

昨日「手を打つてはおいたけど、一手遅かつたみたいだね」と呴いていたのを考えても数日中に事態が変わつてくるはず。

それにまた何日間か九鬼の方で缶詰めになるみたいだし、あそこにいるなら梁山泊も手出しはできないでしよう。

「それから異に伝言は伝えておいたわよ。答えは教えてもらえなかつたけれど」「……それはそうだろうな」

「それでりつちやんが異の攻撃を避けられなかつた理由は分かつたのかしら?」「いいや。情けない話だがさつぱり分からぬ」

昨日の聴取でりつちやんが特殊な眼を持つてていることは聞いている。その眼は数瞬先の未来を——攻撃を見ることができるらしい。

つまり予測ではなく、予知。私の攻撃が狙い通りにいかなかつた理由。

にも関わらず異の攻撃はまつちやんに、そしてりつちやんにも命中した。

「彼の攻撃は見えていたんだ。攻撃の速度も速かつたけれど決して対応できないものではなかつた……はずなんだ」

確かに少なくとも私達の眼で見切れないのでこの攻撃ではなかつた。

タイミングとしては完全に回避しきることが難しかつたのも事実ではあるけれど、無抵抗のまま受けるというのも彼女達の実力からすればおかしな話だ。

「異は強さに見合わないほど気が小さいわ。そのせいで読みきれなかつたということは

?

私もそうだけれどある程度の強さを身に付けた人間はあらゆるものを、特に戦闘中は相手の攻撃を気で察知することに長けている。

言い換えればそれに頼りがちであり、気はないのに強いという世にも珍しい異質な翼の攻撃に惑わされたのかもしれない。

「その可能性は低いと思う。読みづらかつたとか、タイミングのズレとかそういうものではなくて……」

そこまで口にしてりつちゃんは押し黙る。きっと自分の中で言葉を整理しているんでしょう。

けれど続いた彼女の言葉は要領を得ないものだつた。

「なんというか……攻撃を予知した時にはすでに攻撃が当たつていた。そんな感じなんだ」

どういうことだろうか。

未来を予知するというのは攻撃を先読みできるということだ。その未来を見た時点で攻撃が当たつていた？

「……そういうえば」

脳裏にあの時の光景が甦る。

翼が『紫電の腕』と呼んでいた一撃。あれは“2人に直撃してはいなかつた”。

直撃していないと言うと語弊があるかもしれないけれど、でもあの拳は物理的な接触はしていなかつたように見えた。あの瞬間だけ加速していたとも考えづらい。

果たしてそれが意味することは……

「どうした？」

「……いいえ、なんでもないわ」

りつちゃんは怪訝そうな表情を見せながら、でもそれ以上聞いてくることはなかつた。それにほつとする。

まだまだ仲良くなれていらないのは残念だけれど、思いついた仮説がさすがに突拍子もなさすぎて聞かれたら困つていたところだもの。

——攻撃を当てる前に、攻撃を当てたという結果を生み出したんじやないか、なんてね。

梁山泊

「時間ぴつたり。几帳面なことね」

場所はお馴染みの屋上。そこで待ち受けていた最上先輩は姿を現した義経御一考にそう言った。

相対する義経は緊張の面持ち。家臣2人となぜか一緒の直江は特に変わった様子もないが。

「義仲さん……それと、君は……」

初対面の俺を前にして直江以外は『誰だこいつ?』みたいな顔をしている。当たり前だけど。

「私の家来よ」

「ということは義経達と同じクローン……?」

やめろやめろ、変な勘違いを招くな。

「最上先輩、無意味な嘘をつかないでください」

「あら、私の家来は嫌かしら?」

「主人なら考えてあげてもいいですが」

「その気概はとても素敵だわ」

話が進まないな。

いいからさつさと勝負して雌雄を決してくれ。

「あの、すいません」

それを見かねてか直江が会話を割り込んでくる。

「小篠は最上さんの仲間ってことでいいんですか？」

「よくない。俺はただの審判だ」

「審判って、君にそんなことができるの？」

弁慶から「もつともな意見が飛んできた。

俺だつて自信はないし、そもそもやりたくないんだが……。

「やれる限りはやるさ。最上先輩からのオネガイだからな」

「ああ～、そういうこと……」

弁慶は俺の言葉を受けて何かを察したような顔をする。その視線に憐れみの色が若干見えたことを考えれば、俺が巻き込まれた人間だと分かつてくれたらしい。

できればそのまま運の悪い男子生徒という認識でいてくれ。

「とはいえば私が用意した審判だけでは不満も出るでしょうから義経にも中立な立場の生

徒を連れてきてと伝えておいたでしよう?」

「なるほど。つまり俺と小篠でお2人の競い合いの判定をするつてことですね」「ご明察。さて、早速勝負といきましょうか。源氏同士の競い合い……どちらがより、優れた者であるか」

「……」

義経がごくりと唾を飲む。

「1回目はコレで勝負を希望するわ」

そう言つて最上先輩が取り出したのは笛だつた。笛、といつても当たり前だがホイツスルみたいなのじやない。
いわゆる龍笛りゆうてきだ。

「私はピアノを習つていたのよ。そこここ自信があるけど、今はこつちにハマつているのよね」

「義経も笛が好きです。時々街でも吹いてます」

「知つてるわ。貴方と吹いてみたいからこれを種目に選んだのよ」

さすが義経のライバルを自称するだけある。まあ史実を鑑みれば最上先輩が不利そうだ。

今の義経も笛は嗜んでるようだし。

それにしても芸術の分野となれば無知もいいところだ。音楽の知識なんてそれこそ学校の授業で習つた程度のもんであり、笛の音色の善し悪しなんぞ聞き分けられるわけがない。

わざわざ今から音楽に関する見識を身に付けておいたことに対する気も起きないし、普通にファイーリングで判別すればいいだろう。

なんて考へてゐる内に演奏が始まる。

思わず感嘆が漏れそうになるくらい、最上先輩の奏でる笛の音色は澄んでいた。

「素晴らしい……義経もやるぞ！」

それに感化されたようには義経も口に笛を添えた。

そして最上先輩の音に合わせるようにして吹いていく。

平安の時代に流れていたかもしれない音色が、悠久の時を越えて平安の血を継ぐ2人によつて現代に再現される。

「……時間旅行といえば大げさだが、まあこういう形で歴史の一端に触れるのも悪くない。

やがて2人はその演奏を終え、どちらともなくふう、つと息をついた。

「こんなところかしら。さすが、見事な笛の音ね」

「いえ義仲さんこそ！ずっと吹いていたい気になりました」

お互に認め合い、称賛を送る。

理想的なライバル関係だつた。それだけにどちらの笛が優れていたか、判定するのは難しい。

「ありがとう。でも白黒をつけましようか」

表情を引き締めた最上先輩が俺と直江の方に向き直る。

「小篠翼、直江大和。どちらの笛の音が良かつたか、ジャッジしてもらえる?」

「……やつぱり、比べはするんですね。2人とも頑張つたじや駄目なんでしょうか」

「優劣をつけたいわ。何事にも」

義経はこの競い合いにあんまり乗り気じゃないのな。日々挑戦者をなぎ倒してゐるし、勝負事が好きな奴なんだろうと思つていたが。

「俺は義経の友人ですよ。厳密には中立とは言えないかと」

「それぐらいは細かい事よ、気にしないわ。さあさあ」

最上先輩がジャッジを求める。

……そういう氣質の人だと言つてしまえばそれまでだが、どうしてここまで勝負にこだわるのかね?

確かに生い立ちを考えれば義経との競い合ひは最上先輩にとつて生きる上で重要なファクターなのは理解できる。

けどその判定を自分と義経の間だけで着けようとはしない。

公平な判定を求めるという意味では正しいが、どうにも最上先輩が優劣を他人に委ねようとしているように見えるのは気のせいか？まるでどちらが優れているかを周囲に知らしめるようとしている気さえする。

……まあいいさ。俺は自分の役割を果すだけだ。

「じゃあ俺は源義経さんに1票」

さして迷うこともなく俺はそう言い切つた。

「え？」

俺が自分の方を選ぶとは思つていなかつたのか、義経は意外そうな顔をする。

弁慶と与一、そして直江も同様の反応だつた。

「あら、残念。浅からぬ仲だから私を選んでくれるかと思つたのに」

「何度か会話したことがあるだけなんだから充分浅い関係じやないです。だいたい中立な判定を希望したのは最上先輩だし」

なんとなくどうと義経の笛の音の方がよく思えた。

だから俺は義経の勝ちだと判断する。仲がよからうと悪かろうとそこは動かない。

「正論ね。大和はどうかしら？」

「……正直引き分けと言いたいですが、それでもあえて比べるとしたら俺も義経の笛の

音の方がいいと思いました」

「2対0で源義経さんの完全勝利つすね」

「そうね、悔しいわ」

「でもでも、義仲さんだつてすごかつたです！」

「ふふ、慰めてくれるのね。ありがとう義経」

負けても余裕を崩さない最上先輩と、勝ったのに狼狽えている義経。そんな義経を見

ながら川神水を煽る弁慶。

とりあえず俺もう帰つていいかな？

「なあ小篠」

「なんだ？」

帰宅するタイミングを窺つていたら直江に声をかけられた。

「どうして小篠はジャッジを頼まれたんだ？ 実は最上さんと親しかつたのか？」

「まさか。最近まで話したことなかつたよ」

「……それは最上さんの正体が発表されてからつてこと？」

歯にものが詰まつたような聞き方だな。

探しを入れてるってのは分かるけど、そもそもなんで直江がそこを気にするんだ？

……あ、いや待て。まさかそういうことなのか？

「安心しろ直江」

「え、何が？」

「俺は最上先輩と親しいわけじゃない。アプローチをかける邪魔はしないぞ」「……は？」

あれ、直江の反応が薄い。

気になる女の子に男の影が見え隠れしてるから警戒してきたわけじゃないのか？
面白い話をしているわね。大和は私のことが好きなの？」

「なにー、そうなのか大和ー？」

「いや別にそんなことは……ってそれは最上さんに異性としての魅力がないってわけじゃなくてですね。学園の先輩としては好きですが恋愛感情となると話はまた変わつてくるっていうか……」

ああ、直江が最上先輩と弁慶に絡まれだした。すまん直江。

「じゃあ俺は帰るから。直江によろしく言つておいてくれ」

「お、おう……」

所在なきげに立つていた与一にそう告げる。

与一は「こいつこのタイミングで帰るのかよ」とでも言いたげな顔をしていたが、気にしないでその場をあとにした。

「はずなんだけどなあ……」

「何か言つた？ 翼」

「……なんも」

最上先輩の家に数日振りの来訪をするための足取りは重い。

なんでそんなことになつたかと言えば、なぜか未だに最上先輩ん家に滞在している梁山泊の人が俺に話したいことがあると言い出したからだ。

はつきり言つてそれを聞き入れる必要はない。しかしそう伝えると最上先輩からこんな答えが返ってきた。

「そうなると彼女達、学園に転入してきそくなのよね」

潜入や侵入ではなく、転入である。つまり正規の手続きを経て面倒事を持つてくる恐れがある、ということだ。

ふざけんな。大人しく祖国に帰れ。

話を聞く聞かないは別にして、あの2人にそう言つてやるために俺は渋々ながらまたもや最上家にお邪魔することになった。

そして玄関をくぐり、この前と同じくリビングの扉を開ける。

「よう、今日は遅かつたじやないか」

「おかえり。それとパンツ頂戴」

「ごめんなさい、今日ははいていないの」

「マジかよ。まさか変態が2人に増えるなんて……」

「梁山泊の方も増えてね？」

俺の記憶が正しければ黒髪と赤髪のお姉さん2人だつたはずなのに黒髪の貧乳と青髪のパンツ女、そして口りつ娘が最上家のリビングを占拠していた。
全員が同一の衣装を身にまとつてゐることは新たな3人も梁山泊の人間だつてのは分かる。

「あん？ 誰だお前」

貧乳は口が悪そうだな。間違つても巨乳とは言えない最上先輩のおしとやかさを見習えよ。

まあ先輩も性格がいいとは言えないが。いい性格はしてるけども。

「川神学園2年的小篠翼だ。梁山泊が何やら話があるつて言うから出向いてきてやつたぞ」

「わざわざ来ててくれたのか。すまない」

襲撃者の片方、最上先輩がりつちゃんと呼ぶ林冲が頭を下げる。

落ち着きを取り戻したおかげかこつちは礼儀を弁えてるらしい。まあそれはいいと

してだ。

「最上先輩や」

「何かしら?」

「林冲さんの反応を見るに俺を呼んでほしそうにしていたわけじゃなさそうですが」

「まあ彼女から“呼んでほしい”とはお願いされてないわね。ただ5人でどうやって貴方と接触しようか話し合っていたのをたまたま聞いてしまったの」

「その中に学園に入り込むつて案があつたと」

「だいたいそんなところよ」

なるほどなるほど。これ梁山泊の連中ギリギリで悪くねーわ。

「先輩、梁山泊をダシに使いましたね?」

「そういう言い方もできるかも知れないわ。じゃあ私は夕飯の仕度をしてくるから翼はゆっくりしていて」

最上先輩はいつも通りの笑顔を浮かべながらキツチンへと消えていった。

残された俺はため息しか出せない。こういうからめ手つて1周回つて新鮮だな。

あいつらはこういう回りくどいことしないで強制的に死の概念を押し付けてきたり俺の存在を時間ごと無くそうしてきたからな。

ある意味究極の脳筋である。

「だ、大丈夫か？」

林冲さんの心配が身に染みる。

はあ……とりあえず気持ちを切り替えるか。

「問題ない。それで俺に接触したいって話だつたらしいけど何か聞きたいことでも？」

「それはだな……」

「ちよいと待つた」

いざ林冲さんが話し出そうとしたところで横槍が入った。貧乳だ。
どうでもいいけどどこいつ何枚パッド入れてんだろ。

「お前が本当に林冲と武松を倒したのか？」

「ラツキーパンチが決まってな」

「嘘つけ。そんなもんでこの2人に勝てるわけないだろ」

「ですよねー。俺のわずかばかりの抵抗は通用しなかつた。」

そもそも林冲と赤髪——武松というらしい——から直接話を聞いてるなら最初から誤魔化しようがないわけで。

「ならそりとしてあんたは何が言いたいんだ？」

「お前の実力が見たい。わっちと勝負しな！」

「いいぞ」

「お、素直じやねーか」

「ただし条件がある。負けた方は勝つた方の言うことをひとつ聞くってのはどうだ?」
 「はは、分かりやすくていいね!」

この貧乳、自分が負ける可能性を考えてねーな。

そりやこいつレベルの手練れなら相手の気を察知することは容易だろうし、実際俺にはそういう気の類いなんざないから感じ取れるわけもないんだが。

仲間を負かしたと聞いていてもなお心の底から警戒しきれないのは強者故の油断だな。

まあ虎がどうやつても兎を警戒できないのはしかたないことだと言えばそれまでだ。

最上先輩に許可をもらい、中庭に出て貧乳と対峙する。

「天微星、九紋龍の史進だ」

「川神学園生、小篠異」

名乗られたので名乗り返す。

といつてもここじや大層な肩書きもないが。

「いざ尋常に、尋常じやなくとも、勝負!」

そこはせめて尋常であれよ。

なんてつつこむヒマもなく貧乳——史進が突撃してくる。

手にしているのは棍^{こん}。

目測でおよそ240センチくらいかね。まあ一般的な棍だろう。それが思いつきり振るわれる。

——誰もいない虚空めがけて。

史進の棍は当然ながらなものも打つことはなく空を切った。

「……は？」

呆然としたような声が漏れ聞こえた。

大方俺の姿が消えたようにでも見えたんだろう。

「どこ狙つてんだ？俺はこっちだぞ」

俺は史進の真後ろからその背中に向けて声をかける。

史進が勢いよく振り返った。その顔にようやく警戒の色が浮かぶ。

「驚いたぜ。まさかわっちの攻撃を避けるとは思わなかつた」「避ける？何言つてんだ？」

俺は両手を広げて首をかしげる。

そして史進に、答えを教えてやつた。

「俺は最初からここに立つてただけだぞ」

「いや、お前こそ何言つて——「ならよく思い出してみろ」

史進の言葉を遮る。

史進だけでなく、縁側で勝負の行方を見守っている他の梁山泊の3人も訝しげな表情だ。

ちなみにもう1人の口りつ娘は興味ないらしくまだリビングにいる。

「勝負が始まつた時、俺はどこに立つてた?」

「そりやここに、決まつ……て?」

否定しようとして、しかし史進は言葉に詰まる。

当然だ。俺は史進と対峙して、勝負が始まつてから1歩も動いてないんだからな。

史進が、そして他の人々もようやく思い出したらしい。つい数十秒前の記憶を。

「言つた通り俺はずつとここに立つてただろ?なのに勝負が始まつた瞬間、お前が勝手に誰もいない場所へ突撃して攻撃した。それだけのことだ」

「……何をした?」

「お前も分かつてるだろ?俺は何もしてないって」

「そんなわけあるか!まさか幻術……でも、わっちに異能が効くはず……」

「考え込んでるところ悪いけどさ、勝負に集中したらどうだ?」

間合いを詰めるために1歩前に出る。

それに対し史進は構え……ようとして棍がないことに気付く。

「探し物はこれが？」

そう言つて俺は手に持つていた棍を振り回す。なかなかよく手に馴染む。

棒術はさつき一通り嗜んでいることになつたからな。史進に劣らないくらいの技術はあるはずだ。

「い、いつの間に！」

「おいおい、また物忘れかよ。この棍はさつきお前が俺に手渡してくれただろ」

「んな、わけ……あるわけないのに……！」

「いくら否定しても無駄だ。それが事実だからな」

史進が誰もいない空間を攻撃したのも、会話の最中に俺へ棍を手渡したのも、全て事実だ。

幻術でも、異能でも、記憶の改変でも、時間の停止でもない。純然たる事実。

ただそれに対する認識が追いつかなかつただけ。それだけの話だ。

「違う……違う違う違う！ わっちがそんなこと、するはずが……ないのに……っ！」

頭を振りながら史進がうずくまる。そんなことをしたところで記憶がなくなるわけもない。

なんにしろ史進がこんな状態じや勝負にならないのは明白。勝負あり、だ。

「……お前は何をしたんだ？」

「何もしてないさ。ただここに突つ立つて、史進から棍を受け取つただけ。見てたあんた達にもそれは分かつてるだろ？」

「そんなはず……！」

「それよりも史進は大丈夫なわけ？」

「記憶が混乱してるだけだ。しばらくすればそれも治まるさ」

青髪に棍を放り投げ、俺も縁側に上がる。

リビングへと続くガラス戸を開けながら、動けないでいる4人を振り返つて言つた。

「中に戻ろうぜ。そろそろ夕飯もできるだろうからさ」

これでもまだ、俺に踏み込んできただけりやな。

監視

今日の最上家の夕飯は麻婆茄子と春雨スープだつた。梁山泊の連中がいるから中華で攻めたのかかもしれない。

本場の人間にあえて出す辺りが最上先輩らしい。

前も食べさせてもらつて分かつてることだけど、味は文句なしだ。俺もこれくらいできりやなあ。

ふと料理を覚えてしまうかとも考えたが、火急の事態でもないのにそこまですることもないかと思い直す。

ここには遍在固体^{へんざいこくたい}の影も形もなければ、双方^{そうほう}向性^{こうせい}の時間概念を獲得してゐる奴すらいそうにない。

ましてや不死性存在が0秒以下で殺されるような、狂つた奴らが跋扈^{ばっこ}する戦場なんてもんがあるはずもなかつた。

料理なんて今すぐできなくても命に関わることはない。

ああいう世界じやないのなら、人間らしく時間に縛られて物を学ぶのも悪くないだろ

う。

……なんて思いつつさつき棒術を身に付けちゃつたけど。全く同じ技を返されれば精神的なダメージを与えられるだろうし、そうなればわざわざ痛めつける必要もなくな
る。

そう思つてのことだつたんだが披露する前に史進が折れたから使う機会はなかつた。
その史進は記憶の混乱も治まり、今は恨めしそうに俺を睨みながら夕飯を食べてい
る。

大人しくなつてくれて何より。

「おい、何なんだよこの空気……」

史進は黙つたが、史進以外も黙つた空間に耐えきれず、口りつ娘こと公孫勝こうそんしようがそ
うこ
ぼす。

この重苦しい雰囲気の中で普通に食事を楽しんでは俺と最上先輩だけだつた。

「史進に聞いてみたらどうだ？」

「ここでわっちに振るんじゃねえ！」

「負けたからつてイライラすんなよ」

「え、負けたの？こんな素人っぽいやつに？マジかよ……」

どうでもいいけど公孫勝が俺の皿にピーマンを乗せてくる。麻婆茄子の彩りとして

使われてるんだろうけど、見た目通りお子様みたいな好き嫌いをする奴だな。

正直小学生にしか見えないが、これで18歳以上だつてんだから驚きだ。

「負けてねえって！あれは……なんか気の迷いだ！」

まあ自分にそう言い聞かせて納得するしかないわな。

戦闘中に武器を手渡すとか武士娘にとつちやプライド的に許せなさそうだし。

「なあお前」

「なんだ？」

「どうやつて史進……いや、パツドに勝つたんだ？」

「おいコラまさる、なんでわざわざ言い直した？」

史進のこめかみがひくついている。こいつにパツドという単語は禁句なのか。

貧乳つて呼んだらどうなんだろう？……あ、なんか最上先輩が食いついてきそうだから止めとこ。

「よく分からぬけど残念だわ」

「よく分からぬなら黙つてた方がいいんじやないっすかね」

最上先輩が唐突にぶつこんできた。やっぱ止めといて正解だつたわ。

内心冷や汗をかきながら皿の端に積まれたピーマンを口に放り込む。

「あーちゃんとの間接キスね」

「媒介が油と香辛料まみれだと雰囲気もないんですけど。というかなんであーちゃんなんです？」

「公孫勝は役職名みたいなもので本名はユアンというらしいわ」

そのユアンは史進に詰め寄られ、最後は武松に泣きついていた。
ほんと、小学生にしか見えんな。

「……あの、巽。少しいいだろうか？」

「林冲さんや史進を倒したからくりが知りたいんですよね？」

「あ、ああ……」

「ぶつちやけ説明義務はないんですが」

「どうか説明したところで理解もできないだろう。」

言葉としてなら理解はできても、その性質……概念そのものを獲得することはムリだ。

「そこをなんとかお願いできないうるか」

実直。頼み込んでくる林冲さんの姿にそんな言葉が浮かぶ。

言い替えればただの馬鹿でもあるが、そういうマイナスな印象を受けにくいのは林冲さんの人柄かもしれない。

もしくは見た目か。ちょっと幸薄そうだけどかなりの美人だからな。

「なんでそんなに知りたいんです？ 単なる好奇心ですか？」

「それもないと言えば嘘になるが……1番は翼をスカウトしたいと思つたからだ」

「スカウト？ まさか梁山泊にですか？」

「ああ。梁山泊というのは異能を持つた人間の集まりなんだ。翼の力はよく分からないが、もし異能を持つてゐるなら、と」

「俺と接触しようとしてたのはそれが狙いだつたってことか。
異能つてものがどの程度を指すかは知らないが、何にしろ首を縦に振る理由はないな。」

「せつかくのお誘いで悪いが断らせてもらう」

「そうか……」

「理由を聞いても？」

「俺の答えを予想していただろう林冲さんはしゆんと落ち込む。対してパンツ女……

改め楊志は飄々とした姿勢を崩さない。

何となく最上先輩に近い気質を感じる。

「梁山泊に入るつてことは学園を辞めて、この国を出て、傭兵になつて、戦いに身を置くつてことだろ？ したいことが1つもない」

行きたくない理由は山ほどあつて、行きたい理由は全くない。断るに決まつてる。

しかし楊志はニヤニヤしながらこう返してきた。

「……ちなみにだけどさ、梁山泊は108星つて言つて108人の異能持ちがいるんだ。しかも星を名乗れるのが108人つてだけでそれ以外にもたくさんいるの」

「それがどうしたんだ？」

「その全員が女の子なんだよね！」

「ハーレム作れますつてか？興味ないね」

「私に気を遣わなくともいいのよ？ちゃんと1番愛してくれるなら」「ざくざくにまぎれて正妻ポジションに收まるうとしないように」

「まさかホモ？」

「ありきたりなボケをどうも」

最上先輩と楊志のコンビは厄介かもしけん。

しかもこの2人にからかわれるだけでも疲れるつてのに、さらに面倒そうなのが屋敷の外にいる。たぶん九鬼の監視だな。

対象は最上先輩と、アンダーグラウンドじや有名だつていう梁山泊の連中だろう。はつきり言つて俺はおまけ以下だ。

……が、果たして九鬼の人間が取るに足らないとはいへこんな物騒な面子の中にまぎれる俺を見過ごしてくれるだろうか。

自問しといてなんだが、とてもそんなに甘いとは思えない。
はあ、とため息ひとつ。

気乗りはしないが面倒事を避けるため、ここは俺を見逃してもらうとしよう。

「……なかなか動きがありませんね」

「これじや滯在先がホテルから最上家に変わつただけじやねーか」

「しかし先ほどのはなんだつたのでしよう？」

「さあね。梁山泊の1人が変な動きしてたようにしか見えねえけど」

李ちゃんとステ公が食事を楽しむ最上旭と梁山泊を監視しながら愚痴をこぼす。あれがシェイラちゃん達の監視対象なんですけど……。

シェイラちゃん的にはそれよりも、あの場に不釣り合いな1人の少年——小篠翼っていう学園生が気になる。

むむー…………どこかで見たような気がするんですけど……。

「おい毒蜘蛛」

「その名前で呼ばないでくださいーい」

私にはシェイラちゃんっていう可愛い名前があるんだから。

「けつ、ぶりつ子が」

「ああん？」

おつといけない、ステ公が失礼なことを言うからついつい口調が荒れちやつた。

ネットアイドルのシェイラちゃんはドスのきいた声なんて出さないんですから。
でも背中をざつくりやられた恨みは忘れないぞ☆

「今は仕事中ですよ。揉め事ならあとでお願いします」

ステ公が余計なこと言うから李ちゃんに注意されちゃつた。

月夜ばかりと思うなよ、ステ公……。今日は満月なのが口惜しいですけど。

「お疲れさまです」

ステ公といがみ合っていると、不意に声がかけられる。

振り返るとそこにいたのは監視対象の1人、巽ちやんがいた。

「あん？ 何の用だ？」

「差し入れですよ」

そう言つて巽ちやんが2つの紙袋を差し出す。片方にはサンドイッチ、もう片方には飲み物が入つていた。

「おー、気が利きますね！ えらいえらい」

「ありがとうございます、巽」

「なんだ、ハンバーガーじやねえのかよ」

「いらっしゃいなラシエイラちゃんがステ公の分ももらいますよ？ ニヤニヤ」

「けつ、食うよ！ ……ありがとな」

「いえいえ。それで調子はどうですか？」

翼ちゃんも気になるんですかねー。

でも翼ちゃんは向こうにいるんだからわざわざシェイラちゃん達に確認しなくてもいいと思いますけど。

「なーんも変化はねえよ。退屈すぎてファックだぜ」

「まあ監視つてそんなもんですからね。忍耐ですよ、忍耐」

「ステ公の苦手分野ですね☆」

「てめーだって得意じやねえだろうが！」

「まつたく、あなた達は……」

「元気そうで何よりです。ところで上への報告ですが、俺のことはいないものとしてお願いしたいんですが」

「大丈夫ですって。わざわざ翼ちゃんのことを報告したりしませんよ」

「ええ、そんなことをする必要はないですから」

「お前そんなこと聞くためにわざわざ差し入れ持つてきたのかよ」

翼ちゃんも心配性ですねえ。

たとえ監視対象でも、最上家と私達の元の2ヶ所に同時に存在しているとしても、それで翼ちゃんを報告するはずなんてないのに。

「ありがとうございます。じゃあ俺は戻りますんで」

「はーい、お気をつけてくださいね」

去つていく翼ちゃんに手を振る。お姉さんに対するこういう心遣いができるところは可愛いですねえ。

でも、それはそようと……。

「このサンドイッチとコーヒーはなんでしょう?」

「いや、知らねえよ。お前が買ってきたんじやねえの?」

「違いまーす」

いつの間にやら手に持つていた2つの袋に首をかしげる。こんなもの買つてきた覚えはないんですけど……。

「うーん、毒の類いは入つてないし……」

「じゃあ食つちまおうぜ。腹減つてんだ」

「ちよつとステイシー、あなたはもつと慎重に行動してください」

「李が慎重すぎんだよ」

「殺し屋、特に暗殺者は臆病なくらいがちよどいいんです」

「シェイラちゃんやステ公とは正反対ですね!」

結局サンドイッチとコーヒーはステ公に毒見させて完全に安全だつて確認できてか

らシェイラちゃん達も食べることにした。

でもこれは本当に誰が用意してくれたんでしょうねえ。

これで九鬼の方に俺の情報は伝わらないだろう。にしてもメイドが監視とか目立つ

なあ。

でもまあとりあえず……

「最上先輩はおしおきで」

「興奮するわ」

「せめて理由を聞いてください」

おしおきって言わされてノータイムで興奮するとかどんな脳みそしてんすか。

「では理由は?」

「九鬼の監視。あること知つて俺を呼んだでしょ」

「ふふ、翼の目は誤魔化せないわね」

いつも通りのクールな笑み。やっぱり確信犯だつたか。

「本気で俺と信頼関係築こうとしてます?」

「しているつもりよ。でも貴方が優しすぎるから、ついついどこまで許してくれるのか
確かめたくなってしまうの」

優しい、ねえ。そんな風に接してるつもりはないんだけど。

……いや待て、特殊性癖の最上先輩のことだ。普通の優しいとは意味合いが違うかも
しない。

「……先輩」

「何かしら?」

「今日から1ヶ月、ノーパン禁止で」

「そんな……」

最上先輩がショックを受けてよろめく。

このリアクションがマジなのかノリなのか分からぬのがまた。変態の業は深いな。そんなことを思う夜だった。

2 戦目

「このところ周りが騒がしい。この2週間で黛さんや大和田さんと友達になつて、川神先輩や松永先輩といった学園の有名人にはうつすらとだが顔を覚えられた。

しかし極めつけはやっぱり最上先輩関連だろう。あの人と知り合つてから加速度的に面倒事になりそうな人間と面識が増えてきている。

だからまあ、そういう厄介なしがらみが一切ない自分のクラスは俺にとつての安息地でもあつた。

「なあ異、昨日お前と最上先輩が一緒に帰つてるとこ見た奴がいるんだが？」

「どういうことか説明してもらうぞ」

「……」

一応、まだ安息地である。

「俺ら言つたよな？ 無断で彼女作つたら市中引き回しの刑だつて」

「それを了承した覚えはないけど、そういう関係じやないから安心しろ」「じゃあこの前、なんでお前に会いにきたんだよ」

最上先輩の正体が明らかになつた日のことか。

そういうや適当にはぐらかしたままにしてたな。かと言つてきちんと説明できることでもないが。

最上先輩に借りを作つてしまふことになるかと思うとため息が自然と出る。

「俺もこの間まで知らなかつたんだけど、俺がいた孤児院つて最上先輩の父親が関係してたんだとさ。その縁で昔、最上先輩は俺と会つたことがあるらしい。記憶にねーけど

もちろん嘘だ。各種書類上は孤児院出身になつてているだけで施設に居た事実はない。つていうか施設自体もあつたという記録が残つてているだけで、實際にはそんなもの存在してないが。

「そ、 そうなのかな……」

思いがけない内容に友人らの口調が弱まる。これでこの件に關して追求されることはあるまい。

「それで偶然、俺が川神学園に入つたのを最上先輩が知つたらしくてな。わざわざ顔を見にきてくれたんだ」

こんな話でも疑うことなく信じてくれるのはこいつらの美点だと俺は思う。なんて話をしているとケータイが振るえた。

メールの受信。噂をすればなんとやら、その差出人は話題の最上先輩だった。
適当に断りを入れて席を立つ。

届いたメールの内容は『今から義経と勝負をするから空き教室まできてほしい』とい
うものだった。

指定された教室まで行くと中で待ち構えていたのは最上先輩、義経、弁慶、与一、直
江の5人。

そして本日の勝負は――

「腕相撲よ」

「俺要りますかね?」

直江一人で事足りる競技だった。審判が1人でも10人でも判定に違いは出ないだ
ろ。

それとも肘や両足が浮いたり、自分の腕に体の一部が触れたら反則とか、そういう細
かいところまで見ていくガチな勝負なんだろうか。

公式のアームレスリングも主審1人に副審2人でやるらしいし。

「それを言つたら俺なんてもつと来る意味はないがな」

やれやれ、とでも言いたげに与一が首を左右に振る。

「あんたは義経の家来なんだからついてくるのは当たり前でしようが」

そんな与一に対して凄む弁慶。その迫力はなかなかのもので、与一はしつかりビビつていた。

力関係が非常に分かりやすい。

「まあいいや。休み時間も有限だしちゃつちゃとやりましょう」

教壇を挟み、最上先輩と義経が向かい合う。

武人同士だけあってそれだけで空気が張りつめる。まあこういう戦いなら平和的でいいんだが。

2人が教壇に右の肘を乗せ、互いの手を握り合う。

余程集中しているのか義経の表情は真顔だ。対する最上先輩はいつも通りの笑みを浮かべている。

さて、この勝負の結果は如何に。

「それでは、レディー……ゴー！」

直江の合図で試合が始まる。

「ふつ！」

「はっ！」

出だしは拮抗。

絵面だけなら女子高生同士の微笑ましい対決だな。教壇はミシミシと悲鳴を上げて

いるが。

「さすがにやるわね、義経…………」

「義仲さんこそつ…………」

まるで少年漫画のようなセリフの応酬だ。まさしくライバル。

そのまま拮抗することしばらく、2人の額に汗がにじみ出した頃。ついに情勢が傾き始める。

「くつ……」

優勢なのは最上先輩。義経もなんとか盛り返そうと踏ん張るが徐々に押し込まれていく。

そして形勢は逆転することなく決着がついた。

「勝者、最上さん」

直江がそうコールする。もちろんのこと異議を唱える声はない。

白熱した勝負の軍配は最上先輩に上がった。

「これで1勝1敗ね」

「はい……うう、負けてしまつた」

義経が申し訳なさそうに弁慶達の方へ戻っていく。

小さな声で「義経はダメな主だ……」とか嘆いている。たかが腕相撲に負けただけで

落ち込みすぎだろ。

勝った最上先輩の方はいつも通りの……いや、ちょっとドヤってるな。そしてなぜその顔で俺を見るのか。

「お見事」

「それほどでもないわ」

とりあえず賛辞を贈つておいた。

待つてましたとばかりの謙虚なお返事を頂く。なんだかんだ言つて負けず嫌いのは武士娘の性なんだろうか。

「ちよつといい？」

「何かしら、弁慶」

「勝負の結果だから主の負けは認める。でも家臣として主を負けさせたままにはできな
い」

お、なんか不穏な空気になつてきたぞ。

しかし普段は川神水を煽つて飲んだくれてるけど、弁慶つて忠義に厚いよな。さすがクローン……なのかな？

「つまり弁慶はリベンジマッチをしたいと？」

「そうなるね」

「でも私は義経と戦っているから本調子じやないのよ？そんな私を倒してリベンジと言えるのかしら？」

「うーむ、そこを言われると……」

「じゃあこうしましよう。主同士が戦つたのだから、次は家臣同士が戦うというのはどう？」

「乗つた」

おう頑張れ頑張れ。

俺は教室に帰るから。

「……最上先輩」

「なに？」

「制服の裾を離してください」

「ダメよ。貴方今出ていこうとしたでしよう？」

「そりやもう勝負はつきましたからね」

「延長戦よ」

「それは先輩の家臣の役目では？」

「……私には頼れる仲間がいないの。翼以外には」

「俺に弁慶と腕相撲で勝負しろってんですか？腕がもげますよ」

「そこまではしないから安心しなよ」

「安心できない言い方はやめてくんない？百歩譲つてやるなら直江とにしてくれ」「お、俺？」

唐突に名前を出されて直江は困惑する。

「こいつ完全に蚊帳の外から眺めてたな。まあ立場が逆なら俺もそうしてたんだろう」と。

「まあ姉御とやるよりははるかに平等だな」

弁慶の怪力の恐ろしさを知つてゐるであろう与一が援護してくれる。

普通に考えたら勝負になんないのは明白だからな。弁慶だつて最初から勝ち負けの決まつた勝負は面白くないだろう。

「……大和、主の敵討ちを頼むよ」

「マジですか……」

「異、初陣を勝利で飾りなさい」

「何さらつと継続的に戦力に數えようとしてんですか？」

初陣て。これが最初で最後だつての。

自然と漏れるため息が直江と重なる。お互に巻き込まれ事故に遭遇したようなもんだ。

まあ直江を巻き込んだのは俺だけど。
昼休み終了あと5分。

俺は教壇に肘をついて直江の腕を握った。

「……つてことがあつたんだ」
金曜日じやないけどフルメンバーが揃つた秘密基地で、俺は今日あつた出来事を皆に話していた。

源氏勝負はトークのネタにもつてこいだつた。

「腕相撲対決ねえ。確かに弁慶ちゃんと小篠じや勝負にはならないな」「でも俺は弁慶と腕相撲してみたいぜ！」

「怪我するからやめときなよ」

「さすがに素人相手にそこまではしないと思いますが……」

「それでどつちが勝つたの？」

「接戦の末、なんとか勝利をもぎ取つてきました」

「さすが大和。結婚して」

「ありがとう京。お友達で」

「シコシコと筋トレしてる成果が出たな。まあ俺様にはほど遠いが」

ダンベルを上下させながらガクトが勝ち誇るように言った。

確かにガクトの筋肉は冗談抜きで鎧みたいだからな。あかなりたいかと聞かれればノーダanke。

「まあね。でもなんとなく姉さんの言つてた意味が分かつたよ」

「ん? 何か言つたつけ?」

「小篠が壁越えの人達に対しても臆さないって話。近くで観察してみたけど最上さんや弁慶、義経にもそういう様子がなかつたよ」

ああいう特別な人を前にするとその雰囲気に気圧されたり、逆に舞い上がつたりするのが普通の反応だ。接点が少ないならなおさらそうなる。

でも小篠はそれが皆無どころか誰に対しても同じ距離感で接していた。俺に対しても、義経達に対しても。

「あれは鈍感とかそういうんじやなくて、何て言うか……精神的にすごく大人なんじやないかと思う」

例えるなら小篠はたぶん京極先輩に近い人種だ。

学園の誇る美少女達を異性というより姉とか妹とか、下手をすれば小さな子どもを見るような目で見てるかもしれない。

そしてたぶん、ヒュームさんみたいな超人に対しても彼らの特異性を気にすることなく単に一個人として認識しているんじゃないかな？

それが今日、小篠を観察して俺が出した結論だつた。

「それは……ある意味で究極の無関心だな」

「まあ悪く言えば」

関心がないから関わらないんじゃない。小篠はクローンや壁超えの人間と関わってなお、そこまで関心を引かれてないってことになる。

無関心なのか、精神がすでに老成しているのか。どちらにせよかなり珍しいタイプなのは間違いない。

知っている範疇で小篠が興味を示しているのは料理くらいだ。

「キヤップとは真逆のタイプだね」

「好奇心は冒険家の必需品だぜ！」

「それは豪運があつてこそそのセリフだな」

運という要素にも強さのような境界があるのなら、キヤップの運は間違いなく壁を越

えてる。じゃなきやもう死んでもおかしくない。

「しかし俺と真逆のタイプか。ちょっと会つてみてえな」「ああ、キヤップがまた新しいものに興味を……」

モロが呆れたように苦笑する。皆も似たような表情だつた。

しかし、ふと思う。

恥ずかしいから口にするつもりはないが、キヤップは……風間翔一という男は、俺が憧れた男だ。

俺にはできないこと、できない生き方が自然とできる。

そんなキヤップとは正反対の感性を持つている小篠翼。

果たしてあいつはどんな人間なんだろうか。俺はなんとなく、そんなことを考えていた。

「……なーんか嫌な予感がする」

「おい、手が止まつてんぞ」

公孫勝にせがまれてモンスターをハントするゲームを協力プレイしていると悪寒が走つた。

これはあれだ、また新しい面倒事がやつてくるやつだ。

九鬼財閥に梁山泊、川神院……心当たりが多すぎるな。川神だとそちら辺とは無関係

なところから舞い込んできても不思議じやないが。
つーかさ。

「お前いつまで俺の家にいんの?」

突然携帯ゲーム機2台を持って家にやって来て、狩りを手伝えと言い放った公孫勝に尋ねる。

もうかれこれ2時間以上やつてゐるんだけど。

「しらねー。とりあえずしばらくお前のこと観察するみたいなことぶしょー達が言つてたけど」

「ふざけんな」

遊びに来たのかと思つたら監視員じやねーか。

ぐうたらしてゐる公孫勝を小脇に抱えて最上先輩の家に叩き返しに行く。

そこで俺と公孫勝の夕飯がしつかり用意されてゐるのを見て、俺は謀られたことを知るのだった。

「さすがに回りくどくないっすか?」

「だつて普通に呼んでも来てくれないじやない」

「当然でしょ」

「なあ、なんでもいーからさつさと(飯にしようぜ)」

「……お前ってほんと末っ子らしさ全開だよな」

マイペースな公孫勝は、そんなことを言われても我関せざと席につく。梁山泊はこいつのこと甘やかしすぎだろ。

俺の言わんとしたことを察してか、林冲と武松がどこか申し訳なさそうな顔をしているのが印象的だった。

集団登校

登校途中、見知った相手がいたので声をかけた。

「おはよう、大和田さん」

「あ、小篠先輩。おはようございます！」

大和田さんが太陽みたいに輝く笑顔で応えてくれる。

こんなにも上機嫌なのは俺に声をかけられたから、ではもちろんない。単に夕べの試合で七浜ベイが快勝したからだろう。

普段から愛想のいい子ではあるけど、七浜が勝つた翌日はさらに元気がいい。

惜しむらくは七浜の勝率が4割を下回つてることだが。

「昨日はいい試合だつたね」

「はい！若手が抑えて4番が打つ、理想的な試合でした！」

「村口はさすがつて感じ」

「日本代表でも4番ですかね！」

大和田さんと野球トークをしながら登校する。彼女に釣られて七浜の試合を観るよ

うになつたおかげで俺も少し詳しくなつた。

既存の知識と微妙な差はあるが、そもそも川神とか七浜とか、そういう地域レベルでの差異があるので今さらなんだけども。九鬼財閥とか俺のいた日本には影も形もなかつたし。

「そういえば朝は黛さんと一緒にやないんだ」

「家とまゆつちの寮は離れてて。それにまゆつちは寮の人達と一緒に登校してるんですけど」

「へー、黛さんも順調に友達作ってるんだな」

良いことだ。ちょっと心配してたが、考えてみれば直江や川神先輩といった顔の広い友達がいるんだつた。

目標を達成できるかは別にして、黛さんの計画は順調に進行しているらしい。

「そういえばまゆつちから聞いたんですけど……」

「何を?」

「義経先輩と最上先輩の勝負に立ち会つてるって」

「ああ、なんか成り行きでね」

半分脅迫だつたような気がしないでもないが。

「勝負つてどんなことしてるんですか?」

「この間は腕相撲で、その前が笛の腕前を競つてたよ」

「なんか思つてたのと違う感じがします」

「分かる」

あの2人のことだからもつと軍の指揮とか、単純な戦闘能力の競い合いでもするのかと思つてたけどな。

最上先輩曰く競うのは戦いだけじやなく、もつと色々な分野でお互いを高めあつて、人間として成長していきたいつてことらしいから本当に多種多様な勝負をしていくんだろう。

それでも最終的にはやっぱり戦うんだろうけど。そうなればどつちも無傷じや済まないな。

なんて駄弁りながら歩いていくと前方に人だかりを発見した。そこは変態橋との悪名高い多馬大橋たまおおはしだ。

悪名の由来は変人奇人が多い川神においても群を抜いて高い変態の出現率を誇るからだそうだ。

ただ、今回の人だかりはみんな橋の欄干から川沿いの土手を覗いている。変態とは違うものが出てたんだろう。

川神学園に通つて1年以上になる俺には、その光景に覚えがあつた。新1年生の大和

田さんが何事か分からるのはまあしかたのないことである。

「何かあつたんでしようか？」

「たぶん川神先輩じやない」

前に川神先輩を袋にしようとやつてきた不良軍団が朝から河川敷でオブジエに化していたり、腕試しにやつてきた武道家が星になつたりしたことがある。

イベント事が大好きな川神市民、ひいては川神学園の生徒はその都度野次馬となつてああいう人垣を作るのが常だった。

しかし大和田さんは川神市民的には少数派に入るらしく、俺もああいう騒ぎにあまり興味はない。

なので人だかりを避けつつ土手沿いに学園へと向かうこととした。通りすぎ様何が起きているのか確認する。

この騒ぎの原因はやつぱり川神先輩だった。

彼女は河川敷にて次々挑んでくる挑戦者を一撃でなぎ倒していた。なぎ倒すというよりは彼方まで殴り飛ばしている、と表現した方が正確だが。

しかし気になることがひとつ。

「んん？」

「どうかしたんですか？」

「いや、なんで川神先輩の野試合に九鬼が介入してんのかなって」

審判をやつてるのは服装からして間違いなく九鬼の従者部隊だ。

安全確保のためか？でも今までそんなことしてなかつたはずだけど。

「あれは九鬼公認の試合だからよ」

「うわあつ！」

唐突に最上先輩が会話に加わってきた。驚いてる大和田さんには瞬間移動でもして現れたように見えたんだろう。

実のところ少し前から気配を消してこっちを窺っていたんだが。

「おはようございます、最上先輩。あんまり後輩を驚かせないでください」

「ちょっとしたサプライズよ」

「び、ビックリした……」

俺の影に隠れながら最上先輩をおずおずと見る大和田さんは小動物チックだ。

「驚かせてしまつてごめんなさい。本当は異がターゲットだつたのだけど、思いのほか反応がなくて……」

「俺が悪いみたいに言わないでくださいよ」

「どうか今日は車で通学じゃないんですね。並んで歩かれると注目が集まるんですが。」「美少女発見！」

ああ、もう……。

早速厄介なのが釣れたよ。

「おはよう百代。挑戦者達はどうかしら？」

「まあまあだな。たまに筋がいいのはいるけど、義経ちゃんの相手にはならないやつばかりだ」

そりやそうだ。

いくら川神と言えど義経レベルの人間がゴロゴロ転がってるわけもない。

「でもまあ義経ちゃんへの挑戦者の選別をやらせてもらつてるのは退屈しなくていいさ」

「ありがとう百代。私と義経のために」

「なあに、美少女のためならお安いご用さ」

なんとも男前なセリフだった。

しかしまあ、九鬼が試合の審判をやってたのはそういうわけか。

最上先輩と義経はベストな状態で戦うために、お互い挑戦者との試合は控えてるらしい。ただそれに納得できない、我の強い挑戦者を治めつつ選別する役目を川神先輩がやつてるってどこだろう。

バトルジャンキーである川神先輩の息抜きにもなつて一石二鳥だな。卒業までその

まま大人しくしといてほしい。

「お、お前はまゆつちの友達の」

「どうも」

川神先輩が俺の存在に気付く。

「ちなみにこの子も黛さんの友達ですよ」

「は、はじめまして！大和田伊予つていいます！」

未だ俺の影に隠れている大和田さんを紹介する。

少しビビってるけどまあ普通にあいさつできた。たぶん大和田さんも川神先輩のかわゆい子レーダーに引っ掛かってるから可愛がつてもらえるだろう。

「ほう、まゆつちの。しかし小篠、両手に花じやないか。羨ましいぞー」

「最上先輩も大和田さんも俺にとつては高嶺の花ですけどね」

「そ、そんな！私なんて……」

照れる大和田さんは初々しい。

対して最上先輩はさすがの反応を見せた。

「今ならお手頃価格に値下げするのもやぶさかではないわよ？」

「それは高値違います」

なんて下らない会話だろうか。

いやまあこういう中身のない会話をするのも楽しいっちゃ楽しいが、いかんせん相手が悪すぎる。

「おーい！モモせんぱーい！」

内心でげんなりしているとそんな声が届いた。

見れば大所帯がこちらに駆け寄つてくる。半分くらい知らない顔だが、黛さんがいるつてことはあれが寮の人達かもしけない。

「俺達を置いてくなよなー！」

そう文句をこぼすのはバンダナを頭に巻いた男。面識はないが顔と名前は知ってる。
風間翔一。川神学園エレガント・クワットロイケメン四天王の一人だ。良くも悪くも何かと目立つ男である。
「悪い悪い、旭ちやんがいたからつい追いかけてしまった」

「百代は熱烈ね」

「当然だ。旭ちゃんと戦える日に恋い焦がれているんだからな」

「それは義経との勝負が終わつてからよ。まあ訓練の手合わせくらいなら付き合えないことはないけれど」

「本当か!?」

「嘘は言わないわ」

嬉々とする川神先輩。戦闘意欲が全く減退されてねえな。

いや、されてこれなのかもしれん。さすが戦闘狂。

「そうだ、翼も一緒にどうかしら？」

「俺が混ざつたら挽き肉の出来上がりですよ」

お茶しに行くんじゃないんだからナチュラルに誘わないように。

いつまでも最上先輩のトーキーに付き合つてると爆弾が爆発しかねないな。

「なあ直江」

「なんだ？」

「直江つて川神先輩と友達なんだよな？」

「まあ友達つて言うか、弟分かな」

「いやいや、舍弟だろ」

第一印象は筋肉。 そう形容するに相応しい筋骨粒々の男が会話に割り込んでくる。
最上先輩との距離が取れるので全然構わないが。

「舍弟？まさかパシリ……」

「それは誤解だ！」

「そうだぞ！俺達はただの友達でも舍弟でもなく、ファミリーだ！」

風間が誇らしげにそう言つた。“俺達”がどの範囲を指しているのかはいまいち分からんが、川神先輩を追つてきた一団は全員そうなんだろう。

チラツと川神先輩を見る。そしてファミリーという言葉を吟味してから、俺は率直な感想をこぼした。

「マフィア的な?」

「おーい小篠、今お前私を見てから言つたな』

「黛さん助けて』

川神先輩に絡まれたので救援を要請する。

この中で川神先輩の次に強いのは黛さんか最上先輩だ。そのどちらに頼るかなんて悩むまでもない。

「ええ!?」、「この場合はどどどどうしたら……！」

『とりあえず深呼吸して落ち着くんだ!ひっひつふー、ひっひつふー』

黛さん渾身のギヤグ。いや、これは松風のギヤグか。

どつちにしろ滑つてるけど。

「で、直江。ファミリーってのはなんなんだ?」

「え、この空気でそこ聞くの!?」

「黛さんは大和田さんがフォローするから安心していい』

『鬼畜や……この男は鬼畜やで……』

なんだかんだ黛さんは余裕そうである。まあ目的は黛さんのフォローじゃなくて、知

らん上級生に囲まれて縮こまつてゐる大和田さんの氣を紛らわせることだからな。

そんなわけで彼女は黛さんに任せ、俺は気になつたことを直江に聞くことにした。

「えつと、俺達は風間ファミリーって言つて……」

そして登校中、直江から風間ファミリーなるものの説明を受ける。早い話が超絶仲のいい幼なじみ集団つてことらしい。

その中に新入生の黛さんと転校生のフリードリヒがいるのはよく分からんが、まあなんやかんやあつたんだろう。

そこでリーダーが風間だから風間ファミリー、と。

「なるほど。マフィアじやなかつたわけか」

「当たり前だろう。悪はこの騎士クリスが許さん！」

フリードリヒはよく通る声でそう言つた。初対面だが大層目立つ容姿と転校のインパクトがあつたので名前と顔は覚えてゐる。

彼女はドイツ軍人の愛娘だからなのか正義感が強いのかも知れない。

いつぞや廊下で道行く男子の制服の着方に注意しているのを見かけたことがある。

そんな生真面目な人間がダーティなグループに所属するわけないわな。

ちなみにだが、今も遠方から殺氣混じりの警戒した視線が俺に刺さつてゐる。発信元にいるのはS組のドイツ軍人だろう。

名前は確かエーベルバッハさんだつたかな？過保護すぎやしませんかね。

まあ別にちよつかいさえ出さなきや問題ないか。

「騎士か。フリードリヒは正義の味方みたいだな」

「そうだろう、そうだろう！小篠は話の分かるやつだな！」

さすがまゆっちの友達だ！なんて言いながら満足そうに頷く。その友達に今さつき無茶ぶりしたのを忘れてんだろうか。

フリードリヒは素直というか、ちよつとアホの子みたいな感じがするな。

なんて失礼なことを考えながら、そのまま成り行きで風間ファミリーと登校することになつた。

ついでに面識のないメンバーも紹介される。

マツチヨマンが島津岳人しまづがくと、小柄で気弱そうなのが師岡卓也もろおかたくや、俺に興味なさそうなのが椎名京しいなみやこというらしい。

そして最後に紹介されたのが、赤い髪を束ねてボニー・テールにしている川神一子かわかみかずこ。その名前に俺は当然「ん？」となる。

「川神つてことはもしかして……」「ええ、川神百代の妹よ！」

ということらしい。似てないけど。

顔立ちが違이すぎて正直他人にしか見えない。それでも姉妹なんだから何かしら理由があるんだろう。

わざわざ突っ込むこともないので流すことにした。

「へえ、川神先輩って妹がいたんだ。他にもいるのか?」

「いや、ワンコだけだぜ」

「ふー……ん? ワンコ?」

島津が言い放つた単語を思わず聞き返す。

「あだ名よ。アタシの名前は数字の一に子どもつて書くから」

「漢数字の一を英語読みにしてワンコってことか」

幼なじみといえど女の子を犬呼ばわりとはなかなかにアグレッシブである。何も知らない人間からすると結構ぎよつとするあだ名だ。

「じー……」

川神が俺の顔を見つめてくる。

威嚇……じゃないな。観察か?

「何だ?」

「あなたはお姉様と似てないって言わないのね」

そんなことを聞いてくるつてことは別にタブーな話題じやないらしい。もしかした

ら似てないだけで本当に姉妹なのかもな。

だからっていきなり尋ねるわけがない。

「何か事情があるかもしれないし、初対面の相手にそんなこと聞くほど無神経な人間じやないつもりだ」

「おお……大人だわ！」

なんでだよ。いやまあ精神年齢なら確かにだいぶ上ではあるが。

でもあの世界は時間とかあんまり意味ないし、俺が経験したのも那由多なゆたを超える膨大な時間が刹那にも満たない一瞬に凝縮されたような現象だ。

だから加齢や老成を時間の経過によつて判断するなら実質的には肉体も精神も別段歳食つてゐるわけじゃない。

密度がアホらしくらい濃いだけで。

「ちなみにアタシは孤児院出身で、小学生の時に川神院に引き取られたのよ。だからお姉様とは似てはいないの」

「義理の妹つてことか」

「そうよ。でもいつかお姉様みたいになつてみせるわ！強さも、ナイスバディも！」

「ワンコは可愛いなあ」

瞳を輝かせて自身を追いかける妹を見て、川神先輩は親バカならぬ姉バカと化してい

た。

しかし強さは元より、体つきの方も川神先輩に追いつくのは無理難題じやなかろうか。

日本人離れしたプロポーションの川神先輩に対し、川神は平均よりスレンダーなくらいだし。

「あら、百代の妹さんも孤児だったのね」

「ん？ 旭ちゃんの知り合いにもワンコと同じ境遇のやつがいるのか？」

「知り合いというか、異がそうなのよ」

「すげーあっさりバラしましたね」

つーか教えてないのに知つてることはやっぱある程度は身辺調査されてんだな。
どこまで知られているかは……まあ最上先輩の態度を見たら一目瞭然か。俺の生き立ちの不審点に気が付いているからこそ色々つづいてきてるんだろう。

唯一の救いはその行動がマジで自分の興味を満たすためだけらしい、つてことか。これが九鬼主導だつたら今頃俺に何らかの監視があるはずだからな。

そういう意味じや最上先輩は俺を九鬼には報告しないって約束は守ってくれている。
ただ自分の監視に俺を巻き込もうとしてきたり、かなりギリギリのラインを攻めながらだが。

「そ、それは俺達に言つても良かつたんですか？」

直江を始め大和田さんや風間ファミリーの一部が少し気まずそうな顔をしている。まあいきなり孤児とか言われても困るわな。

しかしもちろんのことそういうことにしているだけであつて、話題そのものよりも自分に関心が集まることの方が俺にとつては嫌だつたり。

「別に気にしなくていいさ。秘密にしてるわけじやないからな」「ということよ」

「なんで最上先輩がどや顔なんですかね？」

「勘違いしないで頂戴。これでも貴方を心配しているのよ？」

「例えばどの辺が？」

「異は里親もいない、正真正銘天涯孤独の身でしよう？ いざという時に頼れる、事情を知つている人が必要だと思うの」

正論のように聞こえなくもないが、その頼る人間は俺が選ぶべきだろう。少なくとも川神先輩をその選択肢に入れるつもりはない。

「そ、そなうなんですか？」

大和田さんが思い詰めたような顔で聞いてくる。椎名ですら少し不憫そうな表情だった。

はあ……まあこういう感じになるよな。そんでもって最上先輩は狙つてこんな空気にしてたんだろう。

「……最上先輩の言つたことは事実だよ」

「そんな……」

大和田さんと黛さんは泣きそうになつてている。心優しいというか、感受性が豊かといふか……。

そこまでの問題では全くもつてないんだが。
「お前も苦労してるんだな……」

武神からの慰めのお言葉が重い。

そしてそんな空氣を見計らつたように最上先輩は言い放つた。

「だから異、これからも遠慮なく私の家に来ていいのよ? ご飯くらいいつでもごちそうしてあげるから」

その一言で場の雰囲気は一変し、俺と最上先輩の関係性について色めき立つ。外堀を埋めていくつてのはこういうことを言うんだろう。

事実を元にした言葉しか使つてないのもさすがの手腕だ。今さらだけど最上先輩、俺のこと取り込む気満々つすね。

おいおいどういうことだと迫りくる川神先輩と島津をなんとか宥め透かしつつ、俺が

最上先輩の家にお邪魔したことがあるという事実は伏せてくれと頼み込む。

了承してもらえたが、その結果として俺と最上先輩がそれなりの関係であることが直江達の中では既成事実になってしまった。

登校の合間にこんな大惨事になるとは、思わずため息が漏れる。

視界の端で捉えた最上先輩は、いたずらが成功した子どものように微笑んでいた。